にちぎん

2014 NO.40 冬

インタビュー　扉を開く

田中優子 法政大学総長・江戸文化研究者

江戸に学ぶ、グローバル時代を「生き抜く」知恵

地域の底力

草津町 群馬県吾妻郡

「温泉しかない」その思いが「温泉の王者」を支える

対談　守・破・創

奥村直樹 宇宙航空研究開発機構理事長

森本宜久 日本銀行政策委員会審議委員

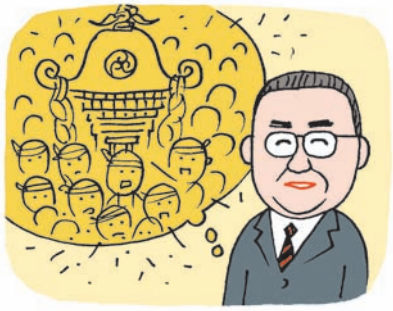
未来への夢がふくらむ宇宙事業は日本の総合力の証し

エッセイ "おかね"を語る

山本一力 作家　遣う快感も

遣う快感も

山本一力



絵・江口修平

何事によらず、だろうが。

溜める過程では、何らかの苦労を伴うことになると思っている。

たとえば知識の習得。

遠い昔、中間試験や期末試験の前夜に励んだ一夜漬けも、思えば知識の習得だった。

眠気覚ましのため真冬の深夜、寝静まった町をひたすら走った。部屋に戻ったあとは、机の脇に置いた電気ストーブを点す。

凍てついた部屋を暖めるには遠い、小型ストーブだ。が、駆けた身体には心地よかった。

暖かさは猛烈な力で眠気をおびき出す。

眠気覚ましどころか居眠りを始めてしまい、ついには熟睡した。

試験前夜の知識習得は難儀だった。

しかし丸暗記の知識を使い、全問を埋めたときには、身体の芯を快感が走り抜けた。

溜めるは苦労だが、使うのは快楽である。

深川富岡八幡宮の本祭りは三年に一度だ。

「なぜ毎年ではなく、三年に一度ですか?」

問いへの長老の答えがふるっていた。

「本祭りに遣うカネが貯まるには三年かかる」

毎年本祭りを催していては、カネがもたないというのが、長老の説明だった。

真偽はともかく、深く得心させられた。

富岡八幡宮本祭りの歴史は古い。

元禄時代の豪商・紀伊国屋文左衛門（紀文）は、京橋材木町（当時）から深川に店を移した。材木の水運には深川が便利だったからだ。

ひとのこころが読める紀文である。移り住んで間もなく、土地の者がいかに富岡八幡宮を大事にしているかを察した。

「費えは問わない。次の本祭りまでに、なんとしても間に合わせるように」

紀文は総金張りの神輿三基を富岡八幡宮に寄進した。のみならず、担ぎ手千人分の半纏（はんてん）と、高価な縮緬ふんどしまで誂（あつら）えた。

土地の者が本祭りに向けてカネを貯め、すべてを遣いきるという気性を見抜いての寄進だ。

他所では「成り上がりの豪商」と言われて、紀文の評判は芳しくなかった。が、深川では紀文の人気は図抜けて高かった。

カネを貯めるには日々の費えを切り詰めて、つましい暮らしを続ける苦労がある。

本祭りでは貯めたカネを一気に遣うという快感を、だれもが等しく味わった。

貯めるは苦労だが遣うは快楽。

明日に備えて貯めるは大事だが、遣ってこそのカネだ。そのときに臨めば惜しむなかれ。

やまもと・いちりき●昭和23（1948）年、高知県に生まれる。昭和41年、都立世田谷工業高等学校電子科を卒業。会社員を経て平成9年、『蒼龍』で第77回オール讀物新人賞を受賞。平成12年に初の単行本『損料屋喜八郎始末控え』を上梓。平成14年には『あかね空』で第126回直木賞を受賞。その他の著書に『だいこん』『峠越え』『辰巳八景』『ジョン・マン（波濤編・大洋編・望郷編）などがある。最新刊は『つばき』（光文社刊）。東京都江東区在住。

にちぎん

WINTER 2014　NO.40

CONTENTS

2 エッセイ／“おかね”を語る
山本一力 作家　遣う快感も

4 インタビュー／扉を開く
田中優子 法政大学総長・江戸文化研究者
江戸に学ぶ、グローバル時代を「生き抜く」知恵

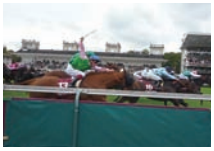
9 地域の底力——群馬県吾妻郡草津町
「温泉しかない」その思いが「温泉の王者」を支える

16 対談／守・破・創
奥村直樹 宇宙航空研究開発機構理事長
森本宜久 日本銀行政策委員会審議委員
未来への夢がふくらむ宇宙事業は日本の総合力の証し

20 FOCUS → BOJ ⑬ 日本銀行決済機構局の仕事
決済サービスの高度化・
決済システムの安全性確保に向けて

日本銀行のレポートから
24「経済・物価情勢の展望」(展望レポート) —2014年10月—
28「金融システムレポート」—2014年10月—

32 トピックス
貨幣博物館資料をFRB美術品展示会へ出展 ほか



35 AIR MAIL from France
老いも若きも楽しむ凱旋門賞

表紙のことば

日本銀行松江支店は、日本銀行の第一四番目の支店として、大正七年（一九一八）三月に開設されました。中国・四国地方では広島支店に次ぐ二番目の支店開設でした。

今回表紙に掲載したのは、二代目の店舗です。初代店舗は金庫の沈下等により建て替えが必要となりました。そこで、日本銀行で初めての現地改築が行われ、昭和十三年（一九三八）三月に完成したのがこの二代目です。鉄筋コンクリート造り地上三階、地下一階の建物は、わが国屈指の古典主義建築家として知られる長野宇平治によって設計されました。

昭和五十六年（一九八一）四月に現在の三代目の店舗に移転後は、松江市に譲渡され、改築・増築を施し二〇〇〇年（平成十二年）四月に、手作り体験施設「カラコロ工房」として開館しました。「カラコロ」の由来は、明治時代に木橋であった松江大橋を渡る下駄の「カラコロ」という音に、小泉八雲が深く心ひかれたとのエピソードによるものと言われています。

松江支店二代目店舗は、「カラコロ工房」として、広く市民に親しまれ続けています。

表紙・画 北村公司

扉を開く INTERVIEW

法政大学総長・江戸文化研究者

田中優子

Yuko Tanaka

江戸文化を多角的に研究した『江戸の想像力』『グローバリゼーションの中の江戸』などの著書や、TV情報番組のコメンテーターとして知られる「江戸学」の泰斗（たいと）田中優子氏が、二〇一四年春、法政大学総長に就任した。一五学部、学生約二万七〇〇〇人、専任教員七〇〇人以上、職員四〇〇人以上という大規模大学を、グローバル時代に向け、いかに改革していくか。その手腕に注目が集まっている。今、我々は何を学ぶべきか。江戸文化の教訓を交えながら、田中氏が語る。

取材・文 安楽由紀子　写真 谷山實

江戸に学ぶ、グローバル時代を「生き抜く」知恵

スーパーグローバル大学（注1）として「持続可能社会の構築」を目指す

――法政大学の総長にご就任されてから半年。大変お忙しいと思いますが、今のお気持ちを伺えればと思います。

田中　ようやく一段落ついた気がします。総長に就任したのは四月ですが、実質的には総長選後の昨年十二月から総長としての広報活動が始まっていて、今年度からの大学運営に向け、様々な準備作業に忙殺されていました。実は、おかげさまでつい先日、文部科学省から「スーパーグローバル大学」として選定されました。今後一〇年間補助金を頂いて運営していく大規模プロジェクトだったので、これでスタートに向けた体制作りという意味では、ひと山越えたところです。

――すでに学内でも、グローバル化を軸とした運営指針を出されていますが、どの大学もグローバル競争の真っただ中にいます。総長の目指すグローバル化とはどのようなものでしょうか。

田中　法政大学が「スーパーグローバル大学」に選定されたポイントでもあるのですが、これからのアジアを見据えて「持続可能社会の構築」を柱としています。日本は少子高齢化が進む一方で、アジアはこれからどんどん人口が増えていきます。そうしますと気候変動などの自然科学系の問題だけでなく、人口面でバランスの悪い社会がやってくる。社会の持続性を保つためには、このアンバランスを解消するため日本とアジアの交流が一段と活発になってくるでしょう。学生たちは卒業したら世界中のどこに行くかわからない。日本にいても日本語ができない外国人が企業の中に入ってくる。学生はこうしたグローバル社会を自分たちの問題として受け止め、生き抜いていく力を身に付けなければなりません。

　また、こうした国際交流が常態化した社会が持続していくためには、相互に多様な文化を尊重することが大切です。今世界中で、宗教や文化の違いを無視し一元的な社会に収斂（しゅうれん）させようとする動きが強まっているように思います。しかし、こうした体制を作ってしまうと、どこかで社会的な混乱が生じます。文化の多様性を認めないと、結局安定は作れないのです。

――国際化すればするほど、持続可能な社会のためには文化の多様性の尊重が大切になってくるんですね。

田中　そうです。今回の「スーパーグローバル大学」の活動を通じ、自然科学だけでなく、社会、文化など多面的に持続可能性を探っていければと思っています。学生も、英語力は必要ですが、それ以上に、その英語で何を話すのか、何を実現していくのか、学生それぞれが課題を持ち、世界中のどこに行っても「生き抜いていく人」に育ってもらえればと思います。

――「生きる」ではなく「生き抜く」という点に厳しさ、力強さを感じます。

田中　それだけ今は危機的な状況にあると感じています。大学はこれまでの研究で得られた知識を教えてきましたが、今まで誰も経験したことがない社会においては、従来の知識では対応できません。「誰かがこう言ったから」といってそれを信じていてもうまくいかない。親御さんの「大手企業に就職しなさい」という指示だけを聞いていたら生き抜けない。大企業で何十年も働いていられるなんてことはもうないわけですから。

――「生き抜く力」を育てるため

注1／**スーパーグローバル大学**　文科省の「スーパーグローバル大学創成支援制度」の対象大学。文科省より、本邦の高等教育の国際競争力向上を目的とし、重点支援が行われる。

注2／**往来物**　明治初期までの手紙形式の初歩教科書の総称。「往来」とは手紙のやり取りの意味。江戸時代には、庶民文化や経済の発達に応じて「商売往来」「百姓往来」「職人往来」等多種多様のものが作られた。

注3／**御家流**　江戸幕府の公用書体。鎌倉時代末の尊円親王を祖とする書の流派である「青蓮院（しょうれんいん）流」の末流。室町時代以降武家で用いられ、江戸時代に寺子屋を通じて全国に普及した。

注4／**葛飾北斎**（一七六〇～一八四九）江戸時代末期の浮世絵師。自称「画狂人」。和漢洋のあらゆる画法を習得し、役者絵を始めとした幅広い分野を描いた。代表作は「富嶽三十六景」「北斎漫画」等。

注5／歌川広重（初代）（一七九七～一八五八）江戸時代末期の浮世絵師。代表作は、「東海道五十三次」「名所江戸百景」等。オランダ出身の画家ゴッホは、「名所江戸百景」の「亀戸梅屋舗」「大はしあたけの夕立」を模写するなど、広重から大胆な構図・遠近法に影響を受けたとされる。

注6／十返舎一九（一七六五～一八三一）江戸時代後期の戯作（げさく）者。町同心の次男。代表作は「東海道中膝栗毛」。

注7／鈴木春信（一七二五～一七七〇）江戸の裕福な趣味人たちの要望を受けて錦絵（多色摺木版画）が誕生すると、その第一人者となる。代表作「雪中相合傘」「夜の梅」「おせんの茶屋」等。

に、何を身につけるべきとお考えですか。

田中　組織の中でうまくやっていく力より、違う背景を持つ人と出会ったときに、ちゃんと自分で考えて対話できる力の方が大事になってきます。スピード感を持つことも大切ですね。何年もかけて考えていては、今の状況に対応できません。早く情報を得て、早く考えを出さなければ。

　そのためには、教育体制を変えなければならない。大人数教室の講義形式の授業では、学生は受け身のことしかできません。授業時間や単位数の制限があるので、いきなり変えるわけにはいきませんが、大教室授業でもグループに分けて議論させるなどの試みを以前から始めています。そして、最終的には少人数型のゼミ主体の体制にシフトしていくことを目標にしています。

――教育研究者側の対応も課題ですね。

田中　確かにその通りです。グローバル化対応にあたって、まず解決を迫られているのは英語での授業です。教えるための英語となると現時点では一部の教師しかできません。が、潜在的にできる教師はたくさんいます。研修などの体制づくりが必要ですが、先生方は積極的に取り組む意欲を持ってくれています。

たなか・ゆうこ●1952年生まれ。神奈川県出身。74年、法政大学文学部卒業。77年、同大学大学院人文科学研究科修士課程修了。80年、同大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学。江戸時代の文学、生活文化、アジア比較文化を専門とし、86年、『江戸の想像力』（筑摩書房）で芸術選奨文部大臣新人賞受賞。2000年、『江戸百夢』（筑摩書房）でサントリー学芸賞、芸術選奨文部科学大臣賞受賞。05年、紫綬褒章受勲。03年、法政大学社会学部教授、12年、同大学社会学部長、14年、同大学総長に就任。

「個が連なっていく」、江戸の「寺子屋」に学ぶべきこと

――ところで、総長のご本を拝見していると、江戸時代は実はグローバリゼーションの中にあって、長崎を通じファッションなどに外国の影響が相当みられたとのお話に驚き、また文化面では予想外に「個」の存在が大きい役割を果たしていたとの印象を持ちました。教育に関して江戸時代において参考になる点はありますか。

田中　ありますね。例えば「寺子屋」。当時は「手習い」と言っていたんですが、あれは大人数を集めているけれども、実は家庭教師のようなものなんです。机がきちっと並んでおらず、一人ひとり違った方向を向いて違ったことをやっている。誰も先生を見ていない。学級崩壊していますね（笑）。

――個人のレベルに合ったものをそれぞれが学んでいるということですか。

田中　その通りです。たくさん生徒はいるけれども、先生がその子の年齢、能力に合わせて教科書を組み合わせ、個人授業をしています。そして当時の教科書の基本は「往来物（おうらいもの）」（注2）、つまり手紙文です。大人になるためには手紙を書ける必要がある。彼らは手紙を書くことを一番大切にしていたんです。

――コミュニケーションですね。

田中　もちろん、武士の子弟は論語なども学びますが、手紙は必需でした。手紙が書ければ、普段の挨拶などに困らないだけでなく、日本全国どこの人とでもコミュニケーションができます。当時の手紙は、全国どこでも「御家流（おいえりゅう）」（注3）という同じ字体が使われていました。手紙さえ書ければ、かなり方言がきつくても話が通じたのです。

――豊臣秀吉や徳川家康の手紙文が有名ですが、庶民の間でも手紙文を重視していたんですね。

田中　生きていくために必要だったんです。商人はもちろん、農民も、織物や手漉きの紙を商人が買い取りに来ますから、コミュニケーション力が必要になって

注8／**蔦屋重三郎**（一七五〇～一七九七）江戸時代の版元（出版人）。洒落本・黄表紙の山東京伝、浮世絵師の喜多川歌麿や東洲斎写楽などの斬新な企画を売り出した。また、戯作者十返舎一九や小説家曲亭（滝沢）馬琴（代表作「南総里見八犬伝」）も蔦屋の世話を受けている。

注9／**東洲斎写楽**（生没年不詳）一七九四年五月頃から翌年三月までのわずか一〇カ月弱の間に版元蔦屋から一四〇種前後の役者絵等を売り出した浮世絵師。代表作「市川鰕蔵（えびぞう）の竹村定之進」「三代目大谷鬼次の江戸兵衛」等。

注10／**喜多川歌麿**（一七五三～一八〇六）当初は黄表紙・洒落本の挿絵画家であったが、一七八一年頃より、版元蔦屋と知り合い、歌麿と改名し、狂歌絵本、美人画の第一人者となる。代表作「ポッピン（ビードロ）を吹く娘」「更衣美人図」等。

注11／**平賀源内**（一七二八～一七八〇）江戸時代中期の科学者、文人、戯作者、洋画家。鉱山採掘、金唐革紙の発明、物産展の企画、現代でいえば広告コピーにあたる「本日土用丑の日」や歯磨き粉「漱石膏」のCMソング等も考案したとされる多芸多才の人。

いました。特に江戸では、参勤交代などで、全然言葉のわからない人たち同士が身近に暮らしていたので、手紙文を学ぶことはとても大切だったのです。

とはいえ、寺子屋はそれぞれの子供の将来の生きる道や能力に沿って指導しており、集団指導が行われていたわけではありません。このような寺子屋社会を私は「連的な社会」と呼んでいます。連句とか俳諧のつながりのように、一人ひとり異なるけれどバラバラではなく、相互につながっている状態ですね。考え方が違う個々の才能を連携して、何かを作っていく、そういう関係性が魅力ですね。

――同様のことを、大学でもゼミ形式で学生たちに体感してもらおうということですか。

田中　まさにゼミは、寺子屋のようなところです。発表も最低限盛り込むべきことはあらかじめ決めますが、中身は自分で考える。こうしたことを通じて自分を作っていくことが大切ですね。手間と時間はかかりますが、大教室で一方的に講義するような内容はインターネット等で済ませ、時間を確保して、ゼミではそれを前提にしっかり議論する。社会学部では一部ですでにそうしたやり方を導入しています。

町人文化には、才能を生かす「プロデューサー」がいた

――浮世絵師の葛飾北斎（注4）や歌川広重（注5）が、ジャポニズムという形でヨーロッパに広がっていったことは、非常に画期的だったと思います。こうしたことが今後、文化の多様性の中で起こることが必要だというのが総長のお考えだと思うのですが、江戸時代にそれが実現したのはなぜでしょうか。

田中　江戸時代の特徴の一つは、職人の世界、ものづくりの世界が発達したということです。例えば、浮世絵師は芸術家ではなく、下絵師、彫師、摺師（すりし）ら職人の連なりの中の一人です。そして「東海道五十三次」も「名所江戸百景」も突然できたわけではなく、「こういう絵が欲しい」というお客さんの要望に職人たちが応えているうちに少しずつでき上がってきたのです。当時のお客さんは、質の高い周辺国の輸入品を目で見ている。輸入品を見ているから、それと同じかもっと質の高いものを欲しいというわけです。職人はそれを乗り越えようとする中で、職人さんへのリスペクトが始まり、更に職人さんのやる気につながっていくんです。

――ヨーロッパでは貴族が芸術をリードし、江戸時代の日本は町人がリードしたように思いますがいかがですか。

田中　実は人口構成からいうと、決して町人は多くはないんです。農民人口が八〇％。武士と町人は残りの二〇％。江戸には、武士と町人が半々でした。職人と呼ばれる人の中にも武士出身や町人出身がいたんです。広重は武士で、北斎は町人。今、私たちが言う「町人文化」は、実は武士の教養と町人の経済力が結びついたものです。

武士と町人の融合文化が作り出された背景には、武士の貧しさがあります。日本の武士は、ヨーロッパの騎士と違って、土地を持っていないんですね。石高制というサラリーマン社会で、かつ石高は限られていたので、黙っては暮らしていけなかったのです。

とはいえ、武士の教養は相当なものです。能や茶の湯も理解している。例えば、十返舎一九（注6）は武士ですが、香道の天才と言われました。鈴木春信（注7）は、出身はわかっていませんが、能の教養があり、能の謡（うたい）をテーマにして絵を描いていることから、武士と深いつながりがあるだろうと推測されています。

これらの才能を、版元である町人がプロデューサーとなり、面白い、売れる商品を作りだすことで、膨大な量の質の高い作品が生まれました。武士と町人の「連」が成立したのです。

――現代でも、職人の技能をうまく生かすプロデューサーの存在が求められている気がします。

田中　蔦屋重三郎（注8）は版元ですが、プロデューサー的な動きをして、東洲斎写楽（注9）や歌麿（注10）、北斎といった浮世絵師を生み出しました。平賀源内（注11）も藩士をやめ浪人化してまで、産業のプロデュース活動に専念しま

注12／**大田南畝**（一七四九～一八二三）蜀山人として知られる狂歌師、文人。幕吏でありながら、天明年間に狂歌会のリーダーとなる。当代の狂歌を選んだ「万載狂歌集」や黄表紙評判記「菊寿草」のほか、自作の狂歌集「蜀山百首」等多数の著書を残す。

注13／**狂歌**　短歌の一種。滑稽、諧謔を旨とし、題材は日常生活や卑近な話題も用いるなど自由。古くは万葉集からみられ、一七八〇年代に江戸で全盛期を迎える。

注14／**石川淳**（一八九九～一九八七）小説家。一九三六年「普賢」で芥川賞を受賞する。和漢洋にかかる博学な知識や遊芸、批判精神に裏打ちされた多くの作品で知られる。代表作は「黄金伝説」「焼跡のイエス」等。また、江戸の遊民や山東京伝等に関するエッセイを残している。

した。大田南畝（注12）は武士でありながら天才的な狂歌（注13）師で、かつ若い才能を発見しては褒めながらプロデューサー的なことをやっている。そうすると、みんな周りがすごいねと言ってくるんですね。当時は、そういうプロデューサーに対するリスペクトがありました。

「個」と「連」の中で成長した学生時代

――総長の就任時、「自分は法政大学で人生の基盤を与えられた」というお話がありました。

田中　私は研究者ではなく物書きになろうと思って大学にいましたから、学部時代は「これだ」と思ったらこっち、また「あれだ」と思ったらそっちに行くということをしていました。そしてその時々にたくさんの出会いがありました。文学、言語学、社会科学……。

――好奇心の赴くままに勉強したわけですね。

田中　大学時代はそれができるんです。だから、ボヤッとしているのはもったいないですね。私が、江戸文学と出会ったのは、近代文学のゼミです。芥川賞作家の石川淳（注14）が書いた江戸に関するエッセイを読んで「江戸時代は、こういう人たちの世界だ」とわかってしまったんです。

――江戸人が手触り感を持って見えてきたということですか。

田中　そうです。何も江戸の知識はないのに、エッセンスがわかってしまった。なぜこんな社会があるんだろう、なぜこんな人間観があり得るんだろうと、大学の後半から江戸時代の勉強を始めて、大学院に進みました。

――多方面からのアプローチで江戸の実態や歴史をひもといていく、学際的なところにはどのようにたどり着いたのでしょうか。

田中　おそらく文学部の中に閉じこもり、ある作家について極めることを重視していたら、今のようにはならなかったでしょう。しかし、私の交友範囲は、理科系や社会科学、文化人類学の研究者まで及んでいまして、その人たちと話していると、江戸についていろいろなことを質問されて答えに詰まることが多かったんですが、そうした外の人の質問にきちっと答えようと勉強したことが大きかったと思います。物事を理解したいと思ったときは、その中だけで見ていてはわからない。外との関係を見る。そうすると必然的に学際的になってしまうんです。

――いろいろな分野の人とコミュニケーションをとりながら、その切り口を吸収し、開拓していく。まさに先ほどの「個」と「連」の概念を実践してこられたんですね。

田中　私は、自分のことを専門家だとは思いません。「これだけを専門に研究すればいい」というのではなく、人間として知りたいことを研究していると考え、垣根を作らないようにしています。

――最後に、六大学初の女性総長として、女性が活躍するための課題をお聞かせください。

田中　環境の問題もありますが、女性自身の意識が重要だと思っています。管理職の話が来ても、責任が重いなどの理由でお断りになる女性が少なくありません。自分はこの程度の人間だ、これでいいんだと思っているんですね。それでは自分の能力は伸びません。ある地位、役割に就くことで、能力が引き出されることもあるので、一歩足を踏み出してほしいと思っています。

しかし、現実には、子育てによってそれが難しい場合が多いのも事実です。昇進や能力開発のキャリアパスを男性に合わせるのではなく、女性の個々の事情に合わせて遅らせて、子育て後にそうしたキャリアを進めるような柔軟な対応ができれば、必ず能力を伸ばせます。それがダイバーシティーということだと思うんです。

――本日は、大変参考になるお話をいただいてありがとうございました。

（聞き手／情報サービス局長・丹治芳樹）

地域の底力

群馬県吾妻（あがつま）郡草津町

「温泉しかない」その思いが「温泉の王者」を支える

日本一の自然湧出量と素晴らしい泉質を誇る、大地の恵み「草津温泉」を授かり、湯治場として栄えてきた群馬県吾妻郡草津町。バブル期を経て大きく時代が変わった今、町の人々の思いはひとつにまとまり、観光地としてのさらなる進化を目指す。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

草津温泉の景色の要となる湯畑。中央、桝目のように並んだ四角い箱は、80～90度の源泉を冷ますための湯樋だ。

歴史と泉質が培った「王者草津」の名声

草津よいとこ、一度はおいで。

草津と聞いて、おそらく多くの方が民謡「草津節」のフレーズを思い出すことだろう。そこに歌われる草津温泉があるのは、群馬県北西部に位置する吾妻郡。源頼朝、奈良時代の僧・行基（ぎょうき）、はたまたヤマトタケルが開湯したとも言われるほど、歴史は古い。

文献に登場するのは、室町末期。江戸時代には既に湯治場としてにぎわい、徳川吉宗が湯を気に入って江戸まで運ばせたという逸話も後に生まれた。明治時代にはドイツの医師エルヴィン・フォン・ベルツにより、高原の保養地として世界にその名が広まった。

現代においても、その支持の高さは変わらない。旅行業界の専門紙「観光経済新聞」主催の「にっぽんの温泉100選」では、一一年連続でトップ。「日本経済新聞」ほか、各種メディアによる読者アンケートなどでも軒並み一位に選ばれ、業界では「王者草津」とも呼ばれている。

人口約七〇〇〇人の町の行政を司るのは、二七年に及ぶ町会議員の経験を経て五年前に町長に就任した黒岩信忠氏だ。草津温泉の人気の秘密と、その背景を伺ってみた。

「これまで来訪客が最大だったのはバブルの時代で、年間三〇〇万人でした。その後、二七〇万人を切ったものの、現在は二八〇万人を超えて右肩上がりになっています」

バブル期における事業の拡大やその後の不況が影響し、今も低迷に悩む温泉地は少なくないが、この地の来訪者が一割程度の減少に収まったのはなぜなのか。

「やはり、長い歴史ある温泉地の底力だと思います」

とはいえ行政サイドが、過去の遺産だけに頼ってきたわけではない。

すり鉢状になった草津の温泉街の要は、温泉が湧きあふれる湯畑。そこに面する一角には、江戸時代から明治時代にかけて実在した温泉施設「御座之湯」が二〇一三年に復元された。さらに、一四年夏には「湯路広場」も完成し、かつての殺風景な駐車場は、ベンチも設けられ、今や憩いの場へと変身。「美しい景観が町を活性化させる」という、代々の町長の思いが継がれた歳月が実った。

そんな湯畑のまわりは昼夜を問わず人でにぎわう。そこを黒岩氏は足繁く訪れ、周囲の声に耳を傾けるそうだ。

「草津って変わってきたね、きれいになったね、などという会話が聞こえてくるんですよ」

一帯には若い人の姿も多く見られたが、実際、若年層、ことに女性の来訪客が増えているともいう。

「若い女性を対象に、草津を選んだ理由を調査したんです。その一

上／1878年に草津を初めて訪れ、温泉と自然環境を高く評価したエルヴィン・フォン・ベルツ博士の像。左／湯畑近くの草津山に建つ「光泉寺」は、1300年近い歴史を有し、その薬師堂は行基が721年に開基したともいわれる。

「長年湯治場としての歴史を紡いできた草津の人には、おもてなしの心がDNAレベルで継がれている」と話す町長の黒岩信忠氏。

14年に復元された「御座之湯」の名は、この地で源頼朝が腰を掛けたとの言い伝えに由来する。

番の理由は、温泉の効能がすばらしいから。うれしかったですね」

草津温泉は、硫黄を含む強酸性。湯に入れば、じわじわと肌にしみ、しかと癒やされる感がある。自然湧出量は、毎分三万二三〇〇リットルと日本一。しかも、なんと五〇〇〇年先まで尽きないそうだ。

負の遺産を断ち切った大胆な財政改革

とはいえ、町の人口は減少傾向にあり、日本創成会議が発表した「消滅可能性都市」にも含まれている。

山間という町の立地を活かして「湯路広場」の一画は段々畑のように設計され、景観に心地よいアクセントをもたらす。

「草津町の定住人口は減っていますが、就労人口の数は逆に伸びている。商店や旅館の数も増えています。今、草津町は人手不足なんです」

就労人口イコール定住人口といかないのは、短期間で働く人もいれば、嬬恋（つまこい）をはじめ近隣から通う人も多いからだそうだ。

「人口減は市町村が成り立たなくなることを意味します。しかし、草津町の経済圏は、温泉が湧く限りしぼむことはないと判断しているんです」

そう話す黒岩氏は、草津活性化の政策に打って出るため、町長就任後に大胆な財政改革も行った。そのひとつが、草津町がオーナーとなる第三セクター「草津観光公社」の建て直しだ。

「観光公社が、赤字から脱却できない温泉施設を持ち悩んでいたちょうどその頃、耐震強度の問題で保育園の建て替えの話が持ち上がってきました。子どもたちのためにも建て替えは優先しなくてはならないが、費用は四億円もかかる。そこで、耐震上は問題が無いその温泉施設を再利用することにしたんです。結果、改装費は一億円で済み、公社の赤字増大のストップと工事費用の軽減という一挙両得となりました」

大胆な財政改革は、切り詰めだけでない。ほかでは例のない、固定資産税の負担軽減も断行した。

「固定資産税は、町の税収の約六五%を占める。しかし温泉でもうけて温泉で損をすると言われるくらい、草津の建物は劣化しやすい。強酸性の泉質の影響を受けるんですね。町民経済の浮揚を考え、減免したんですよ」

減免の根拠を得るべく一年かけた科学的検証で、実際にコンクリートを温泉につけたところ、わずか一カ月でぼろぼろに。もちろん、固定資産税一億三〇〇〇万円の減収には反対意見が多かったが、地方交付税制度等を利用すれば、国からの補てんを含めて財政に大きな穴をあけることがないのを黒岩氏は確認して実行した。

財政の大きな負担だった「草津観光公社」の現状を伺ったのは、代表取締役社長の長井英二氏だ。

「観光公社が所有しているのは、スキー場とゴルフ場と道の駅。そして三軒の日帰り温泉。草津の場合、このドル箱の温泉施設があるからこそ、ほかの施設を維持できるんです」

前出の「御座之湯」は、そのドル箱のひとつ。さらに従来から人気施設だった「大滝乃湯」も、一昨年の改築で前年比三六%の増収と大成功を遂げた。残る「西の河原公園」もまた、散策道路の雪を温泉熱で溶かす設備が整えられる等リニューアルが計画されており、今後に期待がかけられる。

しかし、今も公社の売上の半分を担うのは、バブル時代のピークに八〇万人だった来場者が、今や

（株）草津観光公社代表取締役社長の長井英二氏。「草津国際スキー場」のゲレンデ頂上から好天の日に望遠鏡をのぞくと、「東京スカイツリー」も見えるほど見晴らしがいいとか。

二〇万人にまで激減したというスキー場だ。日本の民間スキー場として最初にリフトがかけられ、一三年には百周年を迎えた由緒ある施設。標高二〇〇〇メートル級の雄大な景観も楽しめるゲレンデは、国内でも稀な存在だ。

「リフトやロープウェイの大改修を行い、ゲレンデも整備したので、今後お客さんに魅力を感じてもらえるようになるでしょう。もとより、かつてのように若い人が日帰りで来てがんがん滑るのではなく、温泉と絡めて泊まりでゆっくり来てもらう場所を目指しています。ゴルフ場も同じ。あまり欲は出してないんです」

自身も大のスキー愛好家である長井氏によれば、スキー人口は底を打ち、最近では緩やかな増加傾向にあるとか。温泉という支えを受け、草津の楽しみ方としてこれから先も訪れる人の記憶を彩ることだろう。

官も民も一丸となり町の活性化に励む

町の未来を考えているのは、もちろん行政サイドだけではない。草津を巡って印象深かったのは、官民関係なく一体となった絆の強さを感じたことにある。四五〇軒の会員を抱える草津町商工会では、会長・武藤義徳氏が草津の魅力を率直に語ってくれた。

「イベントをはじめ何かあると、皆がまとまる。山の中の小さい町ですし、明治時代に温泉場の大半が燃えた大火を経験しているので、皆で手をつなぎ合っている。そういう意味で、草津はとても生きていきやすい町だと思うんです」

ほかの温泉地へ視察に訪れ、その湯に入っても、「帰りの車のなかでは、早く草津に帰って風呂に入りたいと思う」と冗談めかした武藤氏の笑顔に、町への愛情がうかがいしれてうれしくなった。

一〇年から始まり、商工会も力を注ぐのは「街なみ環境整備事業」だ。温泉街地区、外周の高原地区をはじめ町を五つのエリアに分けて場所に応じた協定が結ばれ、景観のための改修には補助金が出される。副会長の堀田洋一氏いわく、町は確実に情緒ある景色を取り戻しているという。

「自分たちの地域を知るため、皆が歩きまわり、それぞれ意見を出し合いながら討論を重ねた。住民が当事者として景観を考え、その歴史や文化を学び直したからこそ、結果につながったんだと思います」

また、将来を見込んだときに、外国人観光客、いわゆるインバウンドへの対応が必要だと話すのは、同じ副会長の後藤文雄氏だ。ことに海外ではごく日常的なクレジットカードがあまり使えない草津の現状を変えるべく、商工会は先頭に立って動いている。

「外国人客は面倒。言葉が通じないから要らない。そんなことは言っ

草津町商工会でお話を伺ったのは、右から建設業を営む会長の武藤義徳氏、建設業ほか食堂や旅館を経営する副会長の後藤文雄氏、同じく副会長で土産物の卸、販売業の堀田洋一氏。業種は異なれど、草津を思う心はひとつ。

草津町の魅力の原点である「泉質主義」を掲げたのは13年前のこと。

草津町は町役場が全国で二番の標高に位置する自治体。温泉だけではなく、眺望を楽しめる「白根火山ロープウェイ」やトレッキングの楽しみも待ち受ける。

（注）草津温泉は、以下三点を掲げ泉質を大切にしている。①自然湧出泉として湯量日本一、②源泉かけ流しの天然温泉、③強力な殺菌力を誇る温泉。

ていられない時代になっている。草津は一〇〇パーセント観光で成り立っている町ですから、そのあたりについては皆さん、理解してくれています」

観光に特化した町だけに、訪れる人々を実際に出迎え、もてなすのは温泉旅館。その代表として最初にお会いしたのは、「望雲」の代表取締役であり、「草津温泉旅館協同組合」の理事長を務める黒岩裕喜男氏だ。

「バブル以降も急激な落ち込みがなかった一番の理由は、首都圏の一角にあるからでしょう。昔から気軽に来られる温泉場だったのが、草津の強みです」

出発地でもっとも多いのは東京都。続いて、埼玉県、群馬県内。

草津温泉旅館協同組合理事長の黒岩裕喜男氏。若手を含め世代を超えてイベントにも取り組める、風通しの良さが組合内にはあるという。

リピート率は約六割だ。

組合では一三年前に、基本に帰ったテーマ「泉質主義」（注）を打ち出した。草津温泉のよさを、誰しもがひと言で説明できるようにするのが目的だ。

「これまで各時代の人たちがいろいろな試みを取り入れて、草津の町を維持してきました。我々の世代は、それを継ぐための努力を皆でしなければなりません。皆で努力するうえでは、草津には江戸時代から温泉を公平に分け合ってきた不文律があるのは大きいですね。約九五％が町の管理。温泉の恵みで食べていることを、昔から感じていたんじゃないでしょうか」

限られた人が権利を持っている温泉地では、後からの参入者が苦労し、トラブルの一因になることもあるようだ。

草津の旅館、民宿の数は寮や保養所を合わせて、約一五〇軒ほど。来訪客は増えているが、稼働率は決して高いわけではない。

そんななか、明るい未来を感じさせたのは、客足が落ちる冬場の状況だ。

「外国のお客様が増えているんです。雪のある冬の温泉というのが、魅力的なんでしょう」

積極的な外国人客への対応としては、商工会でも話題になったクレジットカードに加え、Wi-Fiの環境整備も進められている。

町が一丸となった、マスメディアへの対応も、宿泊客を誘う大きな支えだ。

「観光課や観光協会の皆さんをはじめ町全体がメディアの方々を快く迎え、丁寧に案内してくれる。その積み重ねが、さらなる取材につながっていると思います。非常にありがたいですね」

ニュースや温泉紀行など、草津には年間七〇～八〇件ほどのテレビ取材が入る。飲食店や土産物店は飛び込みの依頼でも厭わないため、「困ったときの草津頼み」ともいわれるそうだ。

そのもてなしの力は、一四年公開の映画『テルマエ・ロマエⅡ』のロケ地に選ばれた際も最大限発

「熱の湯」では湯の温度を下げる草津独自の「湯もみ」を、「草津節」とともに披露。14年秋から改築工事が始まり、15年春には大正ロマンをテーマにした建物に生まれ変わる。下／完成予想図。

湯畑のまわりの欄干には、歴史上の人物から名だたる政治家まで、草津を訪れた100人の名前が刻まれている。

揮された。いいPRになる、町をあげて全面的に協力しようとの流れは早々に決まり、大勢のエキストラの要請に関しては、役場はもちろん、観光協会や商工会、旅館組合にまで集合号令が飛んだ。

帝政ローマ時代の設計技師が、日本の温泉地にタイムスリップする物語は大ヒットに。作品の公開直後から、草津への来訪客数は明らかに増えてきた。

豊かに湧き出る温泉が草津にある限り

各施設をみれば、創業五〇年の「草津ハイランドホテル」の食の面からの改革にも心惹かれた。あらたに考案した「草津味（くさつみ）料理」について、代表取締役の宮崎謹一氏が説明する。

「草つみ（自然食）と草津をかけたんです。旅館に来て宴会を、という時代ではありません。健康志向のお客様に向け、湯治場という草津温泉の原点を考え、体の外からも中からも健やかにとの発想でした」

玄米菜食のマクロビオティックも合わせ、ベジタリアンが多い海外からの客をも見据えた展開だ。

若女将・西場貴子氏もメンバーである、女将会の存在も興味深い。

「ほかの地域にもありますが、草津の女将会の活動は活発ですね。温泉の権利が平等なのが、仲の良さを支えているのかもしれません」

女将会で考案した化粧品は、売れ行き好調。女将たちが勢ぞろいした、華やぎあるポスターも町でたびたび見かけた。多忙な皆さんが時間を合わせるのは、容易ではなかったはずという言葉に、宮崎氏がうなずく。

「草津ハイランドホテル」代表取締役の宮崎謹一氏と、娘さんで若女将の西場貴子氏。ホテル創業と宮崎夫妻の結婚は1964年。14年はともに50周年を迎え、記念すべき年になった。

観光客が散策を楽しめるようにと、温泉街の各所に道しるべが設けられているが、景観を邪魔しない奥ゆかしさがある。

「町ぐるみでやれるのが、やはりいいところですね。よそには農業をはじめ観光以外の産業がありますが、草津は観光一本ですから、まとまりやすいんですよ」

結束力の強さは、創業三〇〇余年の「ホテル一井」常務取締役の市川祥史氏の話からも感じられた。

「ほかではお客の奪い合いのような話も聞くのですが、草津では仲間という意識が強い。ライバルという言葉も聞きませんね」

市川氏はもともと東京で広告業に携わっていたが、八年前の結婚を機に町の一員となった。町に来て草津の四季の変化に感動したという。

「一番好きな季節は春。本当に芽生えの香りがするんですよ。夏は涼しく、秋には紅葉が見られます。冬は雪を見ながら露天風呂に入れるのが幸せ。五感に訴えるものが、草津には十分ある。雪や寒さを味方にして集客につなげられたら、面白いと思うんです」

訪れた人の五感に訴えるのは、欧州から著名な演奏家を招き、コンサートとレッスンが行われる、

創業300余年。草津でもっとも古い歴史を誇る宿泊施設のひとつ、「ホテル一井」常務取締役の市川祥史氏。「一井」の名は一番井戸の意。

草津温泉観光協会の会長も務める中澤敬氏は、かつては草津町町長として行政に携わった。また、国土交通省が中心となって選定した「観光カリスマ」のひとりでもある。

「草津夏期国際音楽アカデミー＆フェスティヴァル」が開催される「草津音楽の森コンサートホール」は608名を収容できる。

「草津夏期国際音楽アカデミー＆フェスティヴァル」もまた然り。一九八〇年から続けられ、国内外での評価も高いが、理事の中澤敬氏は当初の苦労を振り返る。

「当時、地元には、温泉とクラシック音楽は関係ないという反対意見がありました。県をはじめいろいろな方々のバックアップで、なんとか実現にこぎつけましたが、始まって一〇年ほどは毎年、来年はどうなるか不安でたまりませんでした」

しかし、主催者のひとりであり講師としてもアカデミーを支えてきた、ピアニストの遠山慶子氏が美智子妃殿下にピアノを教えていた縁で、やがて天皇皇后ご夫妻が毎年、訪れるという栄誉にもあずかった。

「三五年間も続いてきた理由はやはり、草津が素晴らしいから。非常に快適に過ごせると、演奏家の方たちもおっしゃっています。バブル期には各地で音楽祭が生まれましたが、宿泊施設がないところでは続かないケースが多かった。財政難で、多くの先で中止にもなりました。草津の場合は、町と県に理解があり、音楽祭と温泉街との連携プレーも良くなっています」

九一年には、本格的な「草津音楽の森国際コンサートホール」も誕生した。その周囲は、豊かな木々の緑に彩られている。

草津は実は、土地価格が群馬県内で三番目に高い。町が元気な証しである一方で、七〇％が国有林で民地が限られるのも大きい。この不利な環境も、観光に全エネルギーを注ぐ原動力になっている。

「草津はお客様が来なければ、経済が回らない。観光業だけではなく、建設業も商工業も皆一緒です。ですから、議論はとことんしても、意思決定したら皆で同じ方向を向くんです」と話していた黒岩町長の言葉を思い出した。

草津町の憲章「歩み入る者にやすらぎを　去りゆく人にしあわせを」は、ドイツ・ローテンブルク市の門に刻まれた言葉を東山魁夷（かいい）画伯が翻訳したもの。

町長を先頭に行政、議会、観光協会、商工会、旅館組合、女将会のトップが、東京の大手エージェント回りを行う「トップセールス」は、その真骨頂だろう。「王者草津」は決して、その座に甘んじていない。

取材からの帰りしな、湯畑を眺めながら「ホテル一井」の市川氏の言葉が胸をよぎる。

「仕事で迷いがあると、湯畑を見に行くんです。ふつふつと湯があふれているのを眺めていると、細かいことは気にならなくなる」

温泉とともにその温もりにつながれた町の人々の熱い思いもまた、草津ではそこかしこから湧き出ているに違いない。

観光客の楽しみに限らず、湯畑の眺めはこの町に暮らす人々にとっても心の拠り所になっている。

対談 宇宙破創

小惑星探査機「はやぶさ」の帰還や、「国際宇宙ステーション」での日本人宇宙飛行士の活躍など、日本が宇宙で活躍する領域は着実に広がっている。宇宙開発に込められた未来への夢とそれを支える日本の技術力の素晴らしさ。我が国の宇宙開発で陣頭指揮をとるJAXA（宇宙航空研究開発機構）理事長奥村直樹氏が語ってくれた。

未来への夢がふくらむ宇宙事業は日本の総合力の証し

日本銀行政策委員会審議委員

森本宜久

Yoshihisa Morimoto

1944年兵庫県生まれ。67年東京大学法学部卒業後、東京電力株式会社入社。電力契約部長、取締役エネルギー営業部長、常務取締役、取締役副社長販売営業本部長、取締役・電気事業連合会副会長を歴任。2010年より日本銀行政策委員会審議委員。

宇宙航空研究開発機構理事長

奥村直樹

Naoki Okumura

1973年東京大学大学院応用物理学・博士課程修了後、新日本製鐵株式会社入社。取締役、常務取締役、代表取締役副社長を歴任。2007年総合科学技術会議議員。13年より現職。

アポロ11号から始まった宇宙への思い

森本　今、子どもたちを含めて、人々の宇宙への関心が大変高まっています。私にとってこれまで何より印象的だったのは、一九六九年のアポロ11号の月面着陸です。その映像を何度も繰り返し見ただけでなく、大阪万博（一九七〇年）にも行って、「月の石」を見て宇宙への夢を膨らませたことが大変懐かしく思い出されます。奥村理事長が宇宙を強く意識した体験はどのようなものでしたか。

奥村　やはり、アポロ11号ですね。アームストロング船長が月面に降り立った瞬間、大変なことが起こったぞと、衝撃を受けたこと、今でも鮮明に覚えています。また、その頃大学で物理学を勉強していたせいか、宇宙船の離着陸の様子を見ながら、人間が行ったことのない月でも、地球上でつくり上げられた物理学がきちんと使えることが実証されたのだ、と深い感銘を受けました。基礎的な学問が、場所と時間を超えて普遍性を持っていることを実感した、貴重な機会でした。

写真 野瀬勝一

「はやぶさ」の感動の裏側にあったもの

森本　世界に衝撃を与えたという点では、小惑星探査機「はやぶさ」も同様ですね。先日、筑波の宇宙センターで、「はやぶさ」の実機大の展示を見学しました。一メートル立方ぐらいの小さな身で七年間も宇宙を飛行したのかと思うと、機械にもかかわらず本当にけなげだなと感動しました。

奥村　「はやぶさ」は地球から約三億キロ離れた距離にある、長径五〇〇メートルほどの小惑星「イトカワ」に行ってきました。「はやぶさ」の一番の意義は、あれだけ遠くの小さな星からサンプルをとって地球に帰還できたことです。惑星間往復飛行としては、世界初の偉業でした。サンプルを持ち帰るためには、小惑星への離着陸を始めとして数多くの困難なステップをクリアする必要がありますが、それを全部やり遂げた一連のシステムの信頼性の高さは、国際的に高い評価を受けました。

　そのミッションを支えたのはJAXAの研究者はもちろん、実は日本の中小企業なんです。「はやぶさ」を作り上げたのは、町工場を含む様々な方々の技術の集積です。非常に裾野の広い様々な分野からのご協力があってこその成功でした。

森本　まさに池井戸潤氏の小説『下町ロケット』の世界そのものですね。

奥村　小惑星へ行くという、企画自体も適切だったと思います。小さな天体は重力が小さいので、探査機が星に引っ張られて急激に墜落するような危険も少なく、エネルギーもそれほど要しませんから。

森本　とはいえ、映画化もされ多くの人に感動を与えたように、「はやぶさ」が、様々なトラブルを乗り越え無事帰還し得た裏には、かなりのご苦労があったかと思います。

奥村　遠いところから満身創痍でよく帰ってきたねと、国民の皆さんも感動されたのだと思います。実際、故障を含めてまさに「難航」でした。トラブルが生じても宇宙には修理に行けませんので、「はやぶさ」は、あらかじめ様々な事態を想定して設計を行っています。重要なシステムでは二重化により、一方が動作しなくとも、もう一方が動くようにしています。といっても技術だけではうまくいかない面もあります。そこに人間ドラマが生まれるわけですが、結果的にはバックアップシステムがきちんと働いたと言って良いと思います。

生命の起源を探索する「はやぶさ2」

森本　今年の十一月末に再び小惑星を目指し打ち上げる「はやぶさ2」は、その貴重な経験を生かして計画されたのですね。(注)

奥村　世界的に小惑星への関心は高いものがあります。小惑星には太陽系が約四六億年前に誕生した頃の姿が残されており、小惑星に行けばその起源の謎に迫れるのではないか、と多くの天文学者が考えています。

　「イトカワ」がシリコン（ケイ素）の酸化物が中心の小惑星であったのに対して、「はやぶさ2」が目指すのは、炭素系の物質が相当量あるとみられる別の小惑星です。炭素系の有機物は、地球上の生命の構成要素ですから、「はやぶさ2」のミッションは、まさに「生命の起源の謎を探究する旅」と言えます。

森本　私は、地球上の生命は地球内部の有機物からできたものと思っていましたが、最近、生命体の起源は、宇宙から降ってきた隕石に付着しているアミノ酸だという考え方が有力なようですね。

奥村　そうですね。生命の起源にはいろいろな説がありますが、「はやぶさ2」はこうした学問に大きなインパクトを与えることが期待されます。順調に行けば、二〇二〇年、東京オリンピック開催の年に「はやぶさ2」は戻ってきます。楽しみにしていてください。

宇宙開発に生きる日本人の几帳面さ

森本　最近では若田光一飛行士が日本人初の船長として活躍した「ISS（国際宇宙ステーション）」

はやぶさ２　ランデブー　イラスト：池下章裕

（注）「はやぶさ２」は、12月３日に無事打ち上げに成功し、軌道に乗りました。

も大いに話題になりました。これもJAXAの事業ですね。

奥村　「ISS」は、一五カ国が協力して取り組む国際プロジェクトです。サッカー場と同程度の大きさのステーションが、地上四〇〇キロの高さで九〇分に一回地球を回っているのですが、この中に、日本の「きぼう」をはじめとした、ヨーロッパやアメリカ、ロシアの実験棟があります。

「ISS」の一番の成果は、地上以外で人類が半年間もの長期間生活できるようになったことでしょう。いわば人間の活動領域が広がったと言えます。

二番目は、無重力という空間を生かして、新しい産業や学術の芽を出すような実験を行っていることです。人間は、地球上で生まれ、その重力のもとで進化してきました。当然無重力空間では、生体反応の仕方が異なります。そこで例えば、宇宙空間では骨が弱ることに着目し、骨粗鬆症に関する薬の開発に有効な知見を得たりしています。

森本　船外プラットホームでは、宇宙観測も行っていますね。

奥村　船外施設を持っているのは日本だけでして、ブラックホール候補天体の観測など、新しい発見を幾つもしています。

森本　「ISS」の運用に際しては、国際的な連携、役割分担が広がっている中で、米国のスペースシャトル退役後、日本の宇宙ステーション補給機「こうのとり」が、物資輸送、特に大型の実験装置輸送で非常に大きな役割を果たしているそうですね。

奥村　そうなんです。現在、大型の実験装置を「ISS」まで運べるのは、種子島から打ち上げる「こうのとり」しかありません。平均で年に約一回補給物資を運び、毎回、定時発射・定時到着という、安定した実績を残しています。

森本　日本の列車運行と同じ正確さと安定感ですね！

奥村　鉄道運行と同様に諸外国から非常に評価されており、うれしいことです。一方で今後、その技術やマネジメントの仕組みを他国と共有し、将来の宇宙探査にどう生かしていくかが、我々の大きな課題と考えています。

森本　「こうのとり」と「ISS」のドッキングは、かなりの困難をともなうのでしょうか。

奥村　「ISS」も「こうのとり」も、秒速八キロで飛んでいます。たとえれば新幹線が猛スピードで二列になって走り、その乗客がお互い窓から手を出して握手する。それくらいとんでもないことなんです（笑）。このドッキング技術は、失敗事例もなく、米国企業にも採用されていますが、よくよく見ると機械の自動制御技術やセンサー技術といった基礎的技術の積み重ねでして、基本的な技術がきちっとしていることが一番大切だということを教えてくれます。

森本　そうした優れた技術の裏付けの下、ロケットの打ち上げには万全の体制で臨まれると思いますが、いざ打ち上げとなると、その緊張感は相当なものなのでしょうね。

奥村　半端なものではありません。ロケットの発射や飛行の安全は基本的に国が責任を負っているのですが、実はそれが我々に託されています。余り心臓によろしくない時間です（笑）。

しかも、ロケット打ち上げは始まりにすぎません。ですから打ち上げ後、衛星が所定の軌道に乗り、きちんと働きだすまで、ずっとドキドキしていなければいけないんです（笑）。その反面、喜びもまたひとしおですが。

われわれの日常を支える宇宙技術

森本　ところで、宇宙技術は、未知への挑戦であると同時に、我々の安全安心な日常生活を支えるインフラとしても不可欠の存在になってきているように思います。毎日の天気予報でなじみのある気象衛星「ひまわり」以外にも、「だいち2号」（陸域観測技術衛星）といった、生活に直接関わる地球観測衛星、あるいは地球環境問題に関わる「しずく」、防災システムの構築に役立つ技術衛星「きく8号」、カーナビや車両の自動走行の安全運転を支援する「みちびき」等々、

SSRMS（国際宇宙ステーションのロボットアーム）に把持された「こうのとり」4号機
©JAXA/NASA

対談 守破創

我々の生活には様々な形で衛星のお世話になっているようですね。

奥村　例えば、こうした衛星から海中のプランクトンの状況や海水温も分かりますから、非常に効率のいい漁ができるとして、日本の遠洋漁業では情報活用の動きが広まっています。海外では、農作物の生育状況の観測結果を先物取引で利用するという金融分野での活用等、民間ベースでも、衛星から得られる多様な情報を上手に組み合わせて活用するビジネスがすでに始まっているんです。

宇宙での国際競争を生き抜くために

森本　二〇一五年に初めて、国外企業からの受注で通信衛星を打ち上げられるそうですね。H-ⅡA ロケットの打ち上げ成功率が九五%と極めて高いことが評価されたと聞いていますが。

奥村　「はやぶさ」をはじめロケットや衛星は、多くの産業・研究機関の技術力の集積であり、日本企業の様々な特殊技術も生かされています。特に、先ほどの「こうのとり」の定時運航を支える優秀な人材や技術は、我が国の宇宙開発力の一番の源泉です。

　ある意味で、宇宙技術は国の総合力を示しているともいえ、それがゆえに、先進国だけでなく新興国も今宇宙開発に全力で取り組んでいる状況です。

　我が国は、現状、日本の宇宙事業の九〇%以上が政府の予算でまかなわれている中、厳しい財政状況から、累積での衛星打ち上げ回数は、残念ながら欧米中ロの数百～千以上に対して、日本は数十個と桁違いに少ないのが現実です。

　宇宙開発は多くの企業の技術の総結集が必要な一方で、仕事量は極めて少ないという難しい環境に直面しており、このままでは、現状すら維持できなくなるという危機感を抱いています。したがって、より競争力をつけて民間や他国からロケット打ち上げを受注したり、打ち上げシステム等の輸出量を増やしたりする方策を真剣に考える必要があります。

　また、他国との競争の中では、人間を宇宙に送る分野も想定しなくてはいけませんが、その場合には、ロケット打ち上げ以外の技術開発を伴います。例えば、人を月や火星と地球との間を往復させるとなると、補給を十分に行えないので、宇宙船内での酸素や食料、あるいはエネルギーの再利用といった生活インフラ関連技術を徹底して考えなくてはなりません。また、人や半導体に影響を及ぼす宇宙線の防護技術などもクリアする必要があります。そうした意味では、日本の幅広い分野の総合的な技術力を強みとして活用できる可能性があると期待しています。

森本　宇宙開発というのは本当に総合力が問われますね。

好奇心を持つこと、持たせること

森本　最後に、これまでのご経験を踏まえて、これから広く科学分野で活躍しようとする人たちに、アドバイスをお願いします。

奥村　一番大事なことは、何かを見たときに、どう不思議に感じるか、好奇心を持つということですね。世の中には便利なものがたくさんありますが、それに対して、どうして動くの？　どうして光るの？　という思いを常に持てるようになれば、すでに完成した体系のように見える自然科学分野においても、自分が取り組むべき課題を見つけられるし、科学者・技術者としてひとり立ちできると思います。基礎研究に限らず、常に時間と空間を超えた普遍性を目指す思いをもって取り組むことも大切ですね。また、親御さんや我々のような年長者は、子どもや若者たちの好奇心をどのように涵養（かんよう）していくかに心を砕きながら、見守っていくことも大切だと思います。

森本　まったくもって同感です。本日は、宇宙開発のお話を通じて、基礎の大切なこと、好奇心を持ち続けること、それがひいては我が国の発展や人類の進歩につながっていくということを実感しました。月や火星に安全に旅行できる日がいつの日か遠からず来ることを願っています。大変興味深いお話、ありがとうございました。

日本銀行決済機構局の仕事

決済サービスの高度化・決済システムの安全性確保に向けて

決済機構局は、決済システムの整備、業務継続体制の充実等を図るために設置された部署です。職員数は、約四〇名。日本銀行には、金融機関のお金の決済が安全かつ円滑に行われるようにする使命が与えられています。この使命の下、国民経済を支える決済システムおよび決済サービスの高度化などについて、決済機構局が具体的にどのような取り組みを行っているのか、その業務内容をご紹介します。

私たちの生活に不可欠な「決済システム」

そもそも「決済」とは何でしょうか。日本銀行は「決済」にどう取り組んでいるのでしょうか。決済システム課総務グループ長の伊藤真さんが話してくれました。

「『決済』とは、例えばお金の支払いとモノの受け渡しを行い、取引を完了させることです。決済は、経済取引に伴いさまざまな主体の間で生じますが、日銀は、金融機関が日銀に開設した当座預金口座や国債の口座の間で、金融機関のお金や国債の決済を行っています。こうした日銀が行う決済には、『日本銀行金融ネットワークシステム』―通称『日銀ネット』―というオンライン・システムが利用されています。例えば、モノを買って銀行振込で支払いをしようとすると、モノを買った人と売った人が利用する銀行が異なる場合、銀行間でのお金の決済が必要となります。銀行間の決済は、『全国銀行データ通信システム（全銀システム）』等を経由した後、最終的には日銀ネットを通じて、それぞれの銀行が日銀に持っている当座預金口座間のお金を振り替えることによって行われます。その意味で、日銀ネットは、我が国の決済システムにおける基幹システムと言えます」

このように、日銀は、国民経済に深く関わる重要な社会インフラを運営しているのです。

では、日銀ネットを運営する日銀において、決済機構局とは何をする組織なのでしょうか。伊藤さんの話が続きます。

「決済機構局は、決済システム全体を眺めながら、決済に関して二つのことを目指して業務を行っています。一つは、『決済サービスの高度化』です。これは、金融機関、企業や個人による円や国債に関わる決済を、国内外を問わず、もっと便利でスムーズに行えるようにすることです。もう一つは、『決済システムの安全性確保』、すなわち、決済が確実に行われ、より安心してサービスを利用できるようにすることです。いずれも、決済の仕組み作りや提供するサービスのあり方を見つめ直すことで実現されていくものだと思います」

決済サービスの高度化① 大規模プロジェクト「新日銀ネット」の構築

日本における決済の基幹システムである日銀ネットは、一九八八年の稼動開始以来、大きなシステム障害を起こさず安定的に稼動しています。この間、金融取引のグローバル化や情報処理技術が進展し、国境をまたいだ決済システムの結び付きも強まっています。そこで、日銀では、こうした状況変化に対応した新しい日銀

決済システムの安全性と効率性に関する国際基準
（引用元：国際決済銀行・証券監督者国際機構）

ネット（新日銀ネット）を構築するプロジェクトを進めています。

このプロジェクトを通じた決済サービスの高度化について、決済システム課日銀ネット企画グループ長の引馬誠也（ひくませいや）さんは、次のように語ってくれました。

「新日銀ネットは、最新の情報処理技術を採用すると同時に、金融サービスの変化に柔軟に対応できるシステムになります。また、稼動時間の大幅な拡大が可能となるなど、アクセス利便性が向上します。二〇一五年に全面稼動する新日銀ネットの稼動時間については、開始時刻を八時半に早めると同時に、決済を十九時まで行えるようにします。そして、二〇一六年二月からは、稼動終了時刻を二十一時まで延長します。

稼動時間の拡大で、欧州市場もカバーできるので、国境を越えた円や日本国債の決済がより速く行えるようになります。金融機関にとっては、取引した円や日本国債をより速く効率的に使えるメリットがあります。これにより、決済全体の安全性や効率性の向上にも大きく貢献し、また、円や日本国債にかかる国内外の取引を活性化させることが期待されます」

また、プロジェクトの推進には「総合力」が必要だと引馬さんは語ります。

「大型プロジェクトなので、日銀内のさまざまな部署はもちろん、新日銀ネットに合わせてシステムや事務フローを変更することになる金融機関との綿密な連携が必要です。まさにさまざまな関係者と力を合わせていく『総合力』が必要な仕事で、とてもやりがいがあります」

日銀ネットは、この構築プロジェクトを通じて、より便利かつ安全なものに進化し続けていくのです。

決済サービスの高度化②
決済の分野でのアジア諸国との連携を目指して

日本企業がアジア各国に進出し、現地通貨を調達する必要性が高まる中、決済機構局では、決済の分野でこうした国々との連携にも力を入れています。

日本の金融機関は、現状、日本円と現地通貨を交換しようとすると、米ドル等への交換を挟むこととなり、費用がかさみます。このため、日本の金融機関が持っている日本国債を担保に、直接、現地通貨を調達するといったニーズが高まっています。

また、アジア各国でも他国債券への取引ニーズが高まっている中、アジア域内で各国の証券や資金の取引を迅速かつ安全に行うために、アジア各国の決済システムを相互に接続し、お金と証券の受け渡しを同時に行うことを可能とする仕組みの構築が、ASEAN一〇カ国および日本・中国・韓国の間で議論されています。その議論に参加しているのが、決済システム課証券決済グループ企画役の横谷彰さんです。

「アジア域内では、金融市場の開放度合い・慣行、決済システムにおけるサービスの水準等が国ごとに異なります。そうした中で、決済システムの相互接続を実現するには非常に難しい面があります。しかし、多くの日本企業の海外進出に伴い、域内での円滑で安全な決済を求める声は確実に高まっています。多様な文化・社会を背景に持つ人々と真摯かつ粘り強く話し合いながら、アジア各国の決済システムの相互接続を通じて、この地域の経済発展を決済の側面からサポートしていきたいと思います」

決済サービスの高度化③
リテール決済の利便性向上に向けて

「日銀は、『銀行の銀行』として、金融機関に決済サービスを提供しています。金融機関は、個人や企業、他の金融機関に対して決済サービスを提供し、その最終的な決済を日銀ネットで行っていますので、金融機関が国民にどのような決済サービスを提供しているかを知ることは、日銀にとっても決済システム全体の利便性や効率性、安全性を考える上で重要です。金融機関が提供する決済サービスには、金融機関同士の大口の取引だけでなく、個人などの比較的金額が小さな決済―リテール決済―も含まれます」と語るのは、決済システム課リテール決済システムグループ企画

役の櫻井亮介さん。

リテール決済の中には、私たちの生活に身近な銀行振込があります。この銀行振込については、これを提供する金融機関や、全国銀行協会（全銀協）、全国銀行資金決済ネットワーク（全銀ネット）が、利便性向上に向けた検討を行っています。具体的には、国内の銀行振込等の決済を集中的に処理する「全銀システム」の稼動時間（現状は平日の朝八時半から午後三時半）を、平日の夕方以降や土日祝日も含め、拡大することについて議論が進められています。また、銀行振込を行う際により多くの商取引情報を添付できるようにすることも検討されています。入金を受けた企業等は、添付された情報を見れば、その入金がどの商取引によるものなのかが容易に分かるので、経理事務をシステム処理化するなど、生産性の向上につなげることができます。

諸外国に目を向けると、英国やシンガポールでは、個人の振込を二四時間三六五日、ほぼ即時に無料で相手口座に入金するサービスが提供されています。また、ユーロ圏や英国、シンガポールでは銀行振込に一四〇字の付記情報を書き込めるようになっています。

「国際的な議論の場では、『中央銀行には変化の触媒としての役割がある』と言われます。金融機関にとって、新しいサービスの提供にはシステムの見直しなど、さまざまな課題が伴いますが、日銀としても海外の事例や利用者のニーズ等に関する調査を行うことなどを通じ、金融機関等の取り組みを支援できればと考えています」と、櫻井さんは語ります。

決済システムの安全性確保①
決済リスクの削減等に向けた市場参加者の取り組みの支援

日銀は、金融機関の間のお金の決済がより円滑に行われるよう、他の決済システム運営者や金融機関と日常的に意見交換を行っています。

決済システム課証券決済システムグループ長の清水茂さんは次のように語ります。

「私が関わっている国債市場には、銀行、証券会社、投資信託会社、生命保険会社などさまざまな参加者がいます。こうした参加者は、国債を大量かつ頻繁に売買し、その代金の決済は、金融機関を通じて行われます。このため、日銀でも、国債市場の参加者のニーズを踏まえつつ、決済システムがより効率的かつ安全になる方策を共に考え、その実現を関係者に働きかけています」

そうした取り組みとして、約定の成立から二営業日後としている日本国債の決済慣行を一営業日後に短縮する計画があります。

これは、約定から決済までの期間が長くなれば長くなるほど、その間に取引相手が破綻して、受け取れるはずだったお金や国債を受け取れないリスクが大きくなるからです。金融機関は、国債やお金が約束通りに受け取れることを前提に、次の取引を行いますが、その連鎖がどこかで途切れると、その影響は決済全体に瞬く間に広まっていく可能性があります。

そこで、日本国債の取引の約定から決済までの期間を短くして、お金やモノを受け取れないリスクを小さくすることが有効です。こうした取り組みは、国債市場の効率性向上にもつながるので、海外の市場との競争にも有利に働きます。

「市場全体の仕組みや慣行を変えるには、市場参加者のさまざまな取引動機や対応コストの違いに耳を傾け、意識のギャップを埋めなくてはうまく進みません。また、推進する側に市場取引の実務に関する幅広い知見が求められます。日銀は、中立的な立場で市場全体を見渡し、参加者が課題克服に向けて積極的に取り組んでいけるように努めています。市場参加者の経験と知恵を借りながら、より安全かつ効率的なものを構築していきたいです」と清水さんは抱負を語ります。

決済システムの安全性確保②
安全性と効率性向上に向けた決済システム運営者との対話

お金やモノの決済システムには、「清算機関」と呼ばれる決済システムがあります。

清算機関は、その利用者同士がある金融商

災害対策本部運営訓練の様子

品の取引を行う場合に、買い手側のすべての利用者にとっての売り手となり、また、売り手側のすべての利用者の買い手となるサービスを提供します。再び伊藤さんが語ってくれました。

「二〇〇八年のリーマンショックでは、一部のお金や金融商品の流れが滞り、世界的な金融危機が発生しました。この経験を踏まえ、金融取引の一部に清算機関の利用を求める国際合意が行われました。清算機関を利用すれば、取引相手が破綻しても、当初の予定通りにお金やモノを受け取ることができ、決済の安全性が高まるからです。しかし、取引相手の破綻に伴うリスクは、清算機関に集中します。このため、清算機関をはじめ、決済システム全般の安全性の確保に関心が集まり、二〇一二年、決済システムに関する意見交換を行う国際的な組織であるBIS決済・市場インフラ委員会は、証券監督者国際機構代表理事会と共に、決済システムの安全性と効率性に関する国際基準を公表しました。

日銀が運営する日銀ネットや他の主体が運営する株式・社債等の決済システムもこの基準を満たすことが求められます。

私たちの仕事は、決済システムの運営者と対話を重ね、さまざまな知恵を出し合うことです。そうした中で、利便性・効率性を損なわず、国際基準を満たした決済システムを実現していくことが大切です」

万が一、日本の決済システムにほころびがあれば、国内だけでなく他国にも影響します。その点について伊藤さんは、「緊張感のある仕事ですが、やりがいを感じます」と語ります。

決済システムの安全性確保③
災害など非常時であっても決済サービスを提供し続けるために

災害等により、決済サービスの利用に支障が生じたり、決済に必要な現金の供給や金融市場への資金供給等が滞ったりした場合には、金融・経済に重大な影響が及びかねません。このため、日銀では、災害時でも重要な金融・決済に関する業務を継続できるよう体制を整備しています。また、政府の被災想定等と照らし合わせたり、行内の各部署、政府や金融機関等との意見交換や各種訓練等を通じ、日頃から業務継続体制を点検し必要な手当て等を行っています。これらの取り組みの牽引役である業務継続企画課の企画役の内海和正さんが日銀の業務継続体制について話してくれました。

「災害には地震のほか台風や豪雨、感染症の発生等いろいろな種類があります。平日の日中だけでなく夜間・休日に起こることもあり得ます。いろいろなケースが想定されますが、日銀ネットのバックアップを用意したり、一般にはあまり知られていませんが、交通機関が運休しても業務遂行に必要な役職員を確保できるよう一定数の役職員を営業所近隣に居住・所在させる等、柔軟に事態に対応できる体制を整備しています。また、こうした体制が絵に描いた餅にならないよう体制の整備・充実化も進めています。いろいろな災害等が想定される中、着実に必要な検討や対応を進めるため、何をどういう方法や順番で点検・検討していくのかを方針設定し、行内各部署で目線をそろえながら取り組んでいます。実際に業務継続を担うのは『人』ですので、訓練や研修もしっかり行っています」

有事に際して日銀では、総裁を本部長、業務継続企画課を事務局とする災害対策本部を設置して対応します。

「災害はいつ、どのような形で現れるか分かりません。そのため、デスクワークの検討等だけでなく、常日頃から、『万が一』に備えていなくてはならず、その意味では二四時間三六五日、気の休まらない仕事です。けれども、世の中に役立つという気概で私も含め役職員皆、日々頑張っています」と内海さんは力強く話してくれました。

決済機構局は、決済を巡る時代の変化や有事に対して柔軟に対応し、私たちの暮らしをしっかりと支えてくれる存在なのです。

日本銀行のレポートから

日本銀行は、4月および10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）を決定し、公表しています。本稿では、2014年10月の展望レポート（基本的見解は10月31日公表、背景説明を含む全文は11月1日公表）のポイントを解説します。

＊全文は日本銀行ホームページに掲載されています。http://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm/

「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）

――二〇一四年十月――

展望レポートのポイント

二〇一四～二〇一六年度の中心的な見通し（図表1・2・3）

【景気】

国内需要が堅調さを維持する中で、輸出も緩やかな増加に向かっていくと見込まれ、家計部門、企業部門ともに所得から支出への前向きの循環メカニズムは持続すると考えられる。このため、わが国経済は、消費税率引き上げに伴う駆け込み需要とその反動の影響を受けつつも、基調的には潜在成長率を上回る成長を続けると予想される。

【物価】

消費者物価の前年比（消費税率引き上げの直接的な影響を除くベース）の先行きを展望すると、当面現状程度のプラス幅で推移したあと、次第に上昇率を高め、見通し期間の中盤頃、すなわち二〇一五年度を中心とする期間に、「物価安定の目標」である二％程度に達する可能性が高い。その後は、中長期的な予想物価上昇率が二％程度に向けて収斂（しゅうれん）していくもとで、マクロ的な需給バランスはプラス幅の拡大を続けることから、強含んで推移すると考えられる。

二〇一四～二〇一六年度の中心的な見通しの前提

【景気】

① 日本銀行が今般拡大した「量的・質的金融緩和」（図表4）を着実に推進していく中で、金融環境の緩和度合いは一段と強まっていく。

② 海外経済については、先進国が堅調な景気回復を続け、その好影響が新興国にも徐々に波及する中で、緩やかに成長率を高めていく。

③ 公共投資は、経済対策の押し上げ効果から高水準で推移してきたが、本年度下期中には緩やかな減少傾向に転じていく。

図表１　展望レポートのポイント

2014 ～ 2016 年度の中心的な見通し

【景気】

消費税率引き上げに伴う駆け込み需要とその反動の影響を受けつつも、基調的には潜在成長率を上回る成長を続けると予想される。

【物価】

消費者物価の前年比（消費税率引き上げの直接的な影響を除くベース）は、当面現状程度のプラス幅で推移したあと、次第に上昇率を高め、見通し期間の中盤頃、すなわち 2015 年度を中心とする期間に２％程度に達する可能性が高い。その後、これを安定的に持続する成長経路へと移行していくとみられる。

図表２　政策委員見通しの中央値（対前年度比、％）

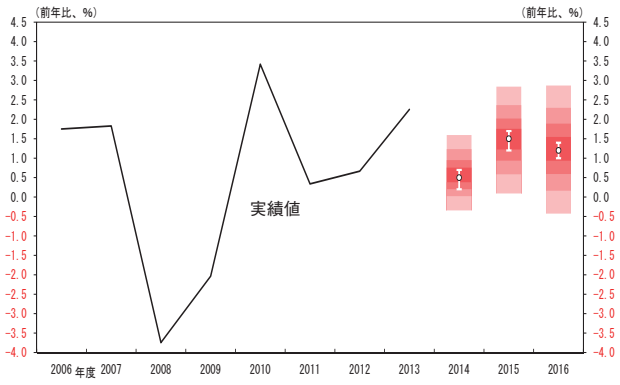
	実質 GDP	消費者物価指数（除く生鮮食品）	消費税率引き上げの影響を除くケース
2014 年度	＋ 0.5	＋ 3.2	＋ 1.2
（7 月時点の見通し）	（＋ 1.0）	（＋ 3.3）	（＋ 1.3）
2015 年度	＋ 1.5	＋ 2.4	＋ 1.7
（7 月時点の見通し）	（＋ 1.5）	（＋ 2.6）	（＋ 1.9）
2016 年度	＋ 1.2	＋ 2.8	＋ 2.1
（7 月時点の見通し）	（＋ 1.3）	（＋ 2.8）	（＋ 2.1）

（注１）今回の見通しでは、消費税率について、既に実施済みの８％への引き上げに加え、2015 年 10 月に 10％に引き上げられることを前提としているが、各政策委員は、消費税率引き上げの直接的な影響を除いた消費者物価の見通し計数を作成している。

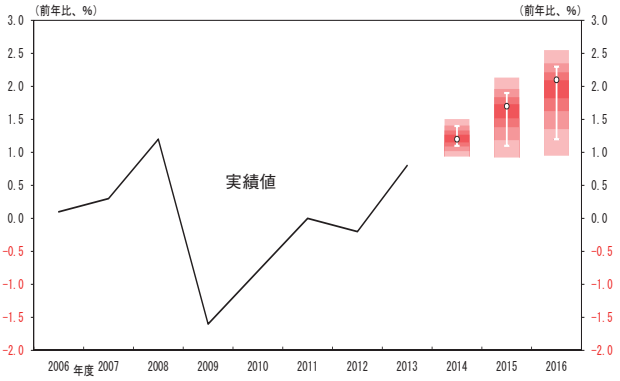
（注２）消費税率引き上げの直接的な影響を含む消費者物価の見通しは、税率引き上げが現行の課税品目すべてにフル転嫁されることを前提に、物価の押し上げ寄与を機械的に計算したうえで（2014 年度：＋ 2.0％ポイント、2015 年度：＋ 0.7％ポイント、2016 年度：＋ 0.7％ポイント）、これを上記の政策委員の見通しに足し上げたものである。

図表３　政策委員の見通し分布チャート

（1）実質 GDP



（2）消費者物価指数（除く生鮮食品）



（注１）上記の見通し分布は、各政策委員の示した確率分布の集計値（リスク・バランス・チャート）について、①上位 10％と下位 10％を控除したうえで、②下記の分類に従って色分けしたもの。なお、リスク・バランス・チャートの作成手順については、2008 年４月の「経済・物価情勢の展望」BOX を参照。

上位40%～下位40%	上位30%～40% 下位30%～40%	上位20%～30% 下位20%～30%	上位10%～20% 下位10%～20%

（注２）棒グラフ内の○は政策委員の見通しの中央値を表す。また、縦線は政策委員の大勢見通しを表す。

（注３）消費者物価指数（除く生鮮食品）は、消費税率引き上げの直接的な影響を除いたベース。

図表 4「量的・質的金融緩和」の拡大（2014年10月31日決定）

図表 4-1「量的・質的金融緩和」の拡大のポイント

マネタリーベースの年間増加ペースを「60 ～ 70 兆円」から **「80 兆円」に拡大**

長期国債の保有残高の年間増加額を「80 兆円」に **「＋ 30 兆円」**

長期国債買入れの平均残存期間を「7 ～ 10 年」に **「＋3年」**

ＥＴＦ、Ｊ－ＲＥＩＴの買入れペースを **「3倍」**

↓

これまで着実に進んできたデフレマインドの転換が遅延するリスクを未然に防ぎ、好転している**期待形成のモメンタム**を維持

図表 4-2「量的・質的金融緩和」の拡大の考え方

- わが国経済は、基調的には緩やかな回復を続けており、先行きも潜在成長率を上回る成長を続けると予想される。
- ただし、物価面では、このところ、消費税率引き上げ後の需要面での弱めの動きや原油価格の大幅な下落が、物価の下押し要因として働いている。
- このうち、需要の一時的な弱さはすでに和らぎはじめているほか、原油価格の下落は、やや長い目でみれば経済活動に好影響を与え、物価を押し上げる方向に作用する。
- しかし、短期的とはいえ、現在の物価下押し圧力が残存する場合、これまで着実に進んできたデフレマインドの転換が遅延するリスクがある。
- 日本銀行としては、こうしたリスクの顕現化を未然に防ぎ、好転している期待形成のモメンタムを維持するため、ここで、「量的・質的金融緩和」を拡大することが適当と判断した。

④政府による規制・制度改革などの成長戦略の推進や、そのもとでの女性や高齢者による労働参加の高まり、企業による生産性向上に向けた取り組みと内外需要の掘り起こしなどもあって、企業や家計の中長期的な成長期待や潜在成長率は、緩やかに高まっていく。

【物価】

①労働や設備の稼働状況を表すマクロ的な需給バランスは、消費税率引き上げに伴う駆け込み需要とその反動の影響を受けつつも、雇用誘発効果の大きい国内需要の堅調さが雇用の増加をもたらすもとで、労働面を中心に着実に改善傾向を続けている。

②中長期的な予想物価上昇率については、やや長い目でみれば、全体として上昇しているとみられる。こうした予想物価上昇率の動きは、実際の賃金・物価形成にも影響を及ぼしている。

③輸入物価についてみると、このところの為替相場の動きは、消費者物価の押し上げ要因として作用する一方、原油価格をはじめとする国際商品市況の下落は、当面物価の下押し圧力となる。

見通しの上振れ・下振れ要因

【景気】

①輸出動向

②消費税率引き上げの影響

③企業や家計の中長期的な成長期待

④財政の中長期的な持続可能性

【物価】

①企業や家計の中長期的な予想物価上昇率の動向

②マクロ的な需給バランス

③物価上昇率のマクロ的な需給バランスに対する感応度

④輸入物価の動向

当面の金融政策運営に関する考え方

二つの「柱」による点検

「物価安定の目標」のもとで、二つの「柱」により経済・物価情勢を点検する（注）。

第一の柱、すなわち中心的な見通しについて点検すると、わが国経済は、見通し期間の中盤頃、すなわち二〇一五年度を中心とする期間に二％程度の物価上昇率を実現し、その後次第に、これを安定的に持続する成長経路へと移行していく可能性が高いと判断される。

第二の柱、すなわち金融政策運営の観点から重視すべきリスクについて点検すると、中心的な経済の見通しについては、輸出の動向や消費税率引き上げの影響など不確実性は大きいものの、リスクは上下にバランスしていると評価できる。物価の中心的な見通しについては、中長期的な予想物価上昇率の動向などを巡って不確実性は大きく、下振れリスクが大きい。より長期的な視点から金融面の不均衡について点検すると、現時点では、資産市場や金融機関行動において過度な期待の強気化を示す動きは観察されない。もっとも、政府債務残高が累増する中で、金融機関の国債保有残高は、漸減（ぜんげん）傾向が続いているが、なお高水準である点には留意する必要がある。

金融政策運営

「量的・質的金融緩和」は所期の効果を発揮しており、今後とも、日本銀行は、二％の「物価安定の目標」の実現を目指し、これを安定的に持続するために必要な時点まで、「量的・質的金融緩和」を継続する。その際、経済・物価情勢について上下双方向のリスク要因を点検し、必要な調整を行う。

（注）「物価安定の目標」のもとでの二つの「柱」による点検については、日本銀行「金融政策運営の枠組みのもとでの『物価安定の目標』について」（二〇一三年一月二十二日）参照。

日本銀行のレポートから

日本銀行は、わが国金融システムの安定性について包括的な分析・評価を示し、金融システムの安定確保に向けて関係者とのコミュニケーションを深めることを目的に『金融システムレポート』を年２回作成・公表しています。『金融システムレポート』の分析結果については、金融システムの安定確保のための施策立案や、考査・モニタリングを通じた個別金融機関への指導・助言に活用しています。また、国際的な規制・監督の議論にも活かしています。金融政策においても、マクロ的な金融システムの安定性評価は、中長期的な視点も含めた経済・物価動向のリスク評価を行ううえで重要な要素のひとつとなっています。

＊全文は日本銀行ホームページに掲載されています。http://www.boj.or.jp/research/brp/fsr/index.htm/

「金融システムレポート」

――二〇一四年十月――

今回の特徴

今回のレポートでは、金融システムの現状評価に加え、「将来にわたる金融安定の確保に向けて」として、将来の金融システムの安定性・機能度に影響を及ぼし得る要因を整理したうえで、金融機関の経営課題や日本銀行の取組みについて記述しています。また、金融機関に内在するリスクについても、各リスクの現状評価だけでなく、金融機関がリスク管理上、留意すべき点を記述しています。さらに、金融資本市場から観察されるリスクについても、わが国の市場に加え、国際金融資本市場に関する分析を充実させています。

日本銀行は、わが国金融システムの安定確保に一層貢献していく方針であり、こうした観点から、今後も『金融システムレポート』の充実に努めていきます。本稿では、金融システムの機能度と安定性に関する評価を中心に、要点を述べたいと思います。詳しくは、レポートをご覧ください。

金融システムの総合評価

わが国の金融システムは、安定性を維持しています。金融仲介活動は、より円滑に行われるようになっています。

金融システムの機能度

金融機関は、引き続き、国内外で貸出を積極化しています。国内では、相対的に信用力の低い企業への貸出にも取り組むなど、リスクを取る方向での業務運営を指向しています。成長事業の育成や事業再生にも着実に取り組んでいます。国内貸出は、幾分伸びを高めており、徐々に地域・業種の広がりもみられます（図表1）。この間、資金需要が緩やかな増加にとどまっていることを映じて、貸出利鞘の縮小が続いています。海外では、本邦企業の国際展開の支援等に積極的に取り組んでおり、海外貸出は高い伸びを続けています（図表2）。有価証券投資では、高水準の円債残高を維持しつつ投資信託等を積み増すなど、小幅ながらリスク・テイク姿勢を強めています（図表3）。この間、金融資本市場を通じる金融仲介は、エクイティ・ファイナンスが引き続き高水準で推移するなど、良好な発行環境が維持されています。こうしたもとで、企業・家計を取り巻く金融環境は、より緩和的になっています。

金融システムの安定性

以上のような金融仲介活動におい

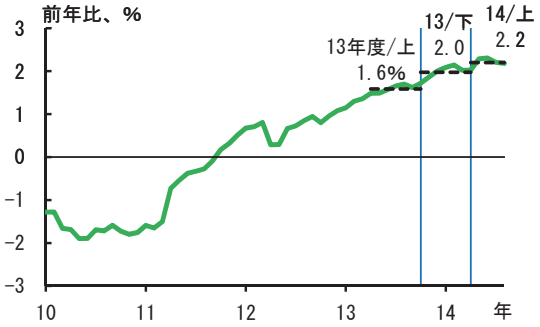
て、信用量のトレンドからの大幅な乖離など、過熱を示す動きはみられていません（図表４）。国際金融資本市場では、ボラティリティが低水準で推移するもとで（図表５）、リスク資産への資金流入やリスクプレミアムの縮小を伴う「利回り追求」が強まりました。本邦市場でも、総じて低ボラティリティ環境が続くもとで長期金利は低水準で推移し、株式市場やクレジット市場も堅調に推移しましたが、過度な期待の強気化等は窺われていません。

金融機関は、全体としてみると、充実した資本基盤を有しています。自己資本比率は規制水準を十分に上回っています。金融機関の負っているリスクは、前回レポート時に比べて株式、金利リスクが幾分増加しましたが、自己資本も利益の蓄積等から充実が進みました（図表６）。自己資本対比でみたリスクの蓄積状況に大きな変化はみられていません。こうしたもとで、金融機関は、大幅な景気の悪化、金利の上昇といったショックに対して、相応に強いストレス耐性を有しています。ただし、経済・金融のショックの背景、程度、速さによっては、金融システムの安定性に影響が及ぶ可能性がある点には留意が必要です。また、資金流動性についてみると、金融機関は、円資金について十分な資金流動性を有しています。外貨資金は市場調達の比重が高い調達構造となっていますが、調達の長期化等の取組みから、一定期間調達が困難化しても資金不足をカバーできる流動性を確保しています（図表７）。

将来にわたる金融安定の確保に向けて

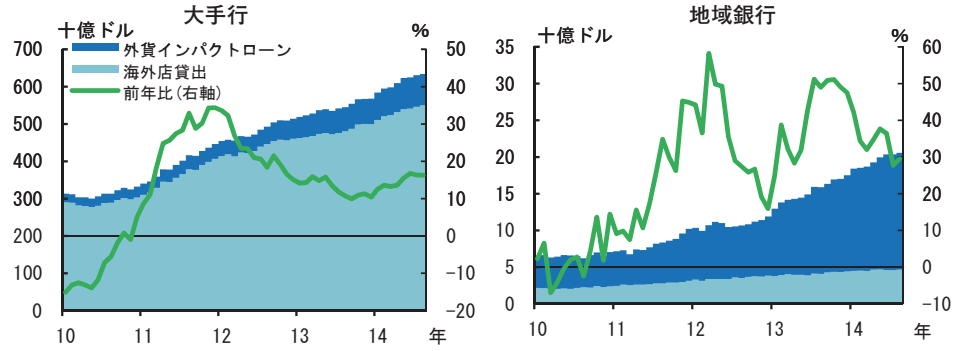
先行きを展望すると、現在進行し

図表１　金融機関の国内貸出



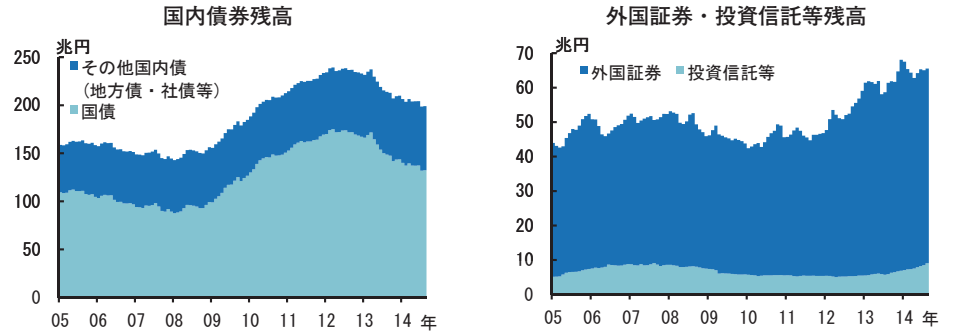
（注）1. 集計対象は銀行と信用金庫。直近は14年８月。
2. 横線は半期平均値。縦線は左から、13年９月、14年３月。
3. 銀行分の貸出残高は、為替変動要因、貸出債権償却要因、貸出債権流動化要因等を調整した特殊要因調整後計数。
（資料）日本銀行「貸出・預金動向」

図表２　銀行の海外店・外貨貸出



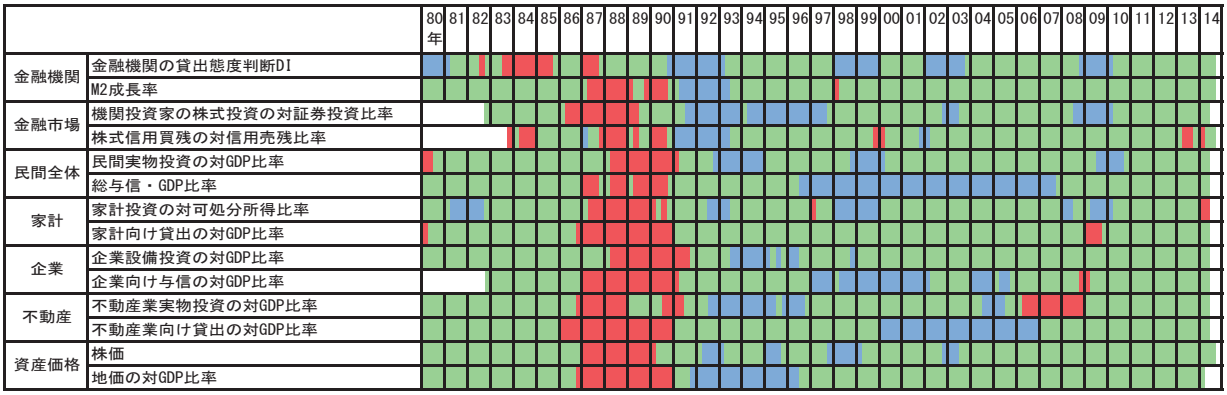
（注）1. 直近は14年８月。
2. 海外店貸出は、一部海外店勘定の外貨インパクトローンを含む。
3. 外貨インパクトローンは、金融機関が居住者に対して行う外貨建て貸出。
4. 前年比は、外貨インパクトローンと海外店貸出の合計の伸び率。
（資料）日本銀行

図表３　金融機関の有価証券投資



（注）1. 集計対象は銀行と信用金庫。直近は14年８月。
2. 国内店と海外店の合計。国内店は平残ベース、海外店は末残ベース。
（資料）日本銀行

図表４　金融活動指標



（注）直近は、金融機関の貸出態度判断 DI、株価は 14 年７～９月、M2 成長率、株式信用買残の対信用売残比率は 14 年７～８月、地価の対 GDP 比率は 14 年１～３月、その他は 14 年４～６月。

（資料）Bloomberg、財務省「法人企業統計」、東京証券取引所「信用取引残高」、内閣府「国民経済計算」、日本不動産研究所「市街地価格指数」、日本銀行「貸出先別貸出金」「資金循環統計」「全国企業短期経済観測調査」「マネーサプライ」「マネーストック」

※赤色：過熱方向（トレンドを一定幅以上上回る状態）/ 青色：停滞方向（トレンドを一定幅以上下回る状態）/ 緑色：それ以外 / 白色：データがない期間

ている経済のグローバル化や国・地域の産業構造の転換が、さらに進捗していくことに伴って、質・量両面で、金融システムの担う金融仲介機能、リスクも変容していくと見込まれます。わが国の成長力や景気・物価情勢の行方は、金利や株価形成等を通じて、金融機関の有価証券投資における投資姿勢やパフォーマンスにも影響していきます。また、国際金融資本市場における「利回り追求」の強まりは、今後の展開によってはわが国に影響を及ぼすと考えられます。このように、内外金融経済環境は継続的に変化しており、これに伴って金融システムのリスク・プロファイルも変わっていくと見込まれます。

また、金融機関の国内貸出利鞘の縮小傾向、収益力の低下傾向が長引けば、金融機関のリスク・テイク能力、損失吸収力を制約していきます。さらに、経済のグローバル化に伴ってわが国の金融システムが海外との結びつきを強めるもとで、抜本的な国際金融規制改革、グローバル金融システムの構造変化が進行しています。これらの要素も、中期的にはわが国金融システムの安定性、機能度に影響を及ぼしていく可能性があります。

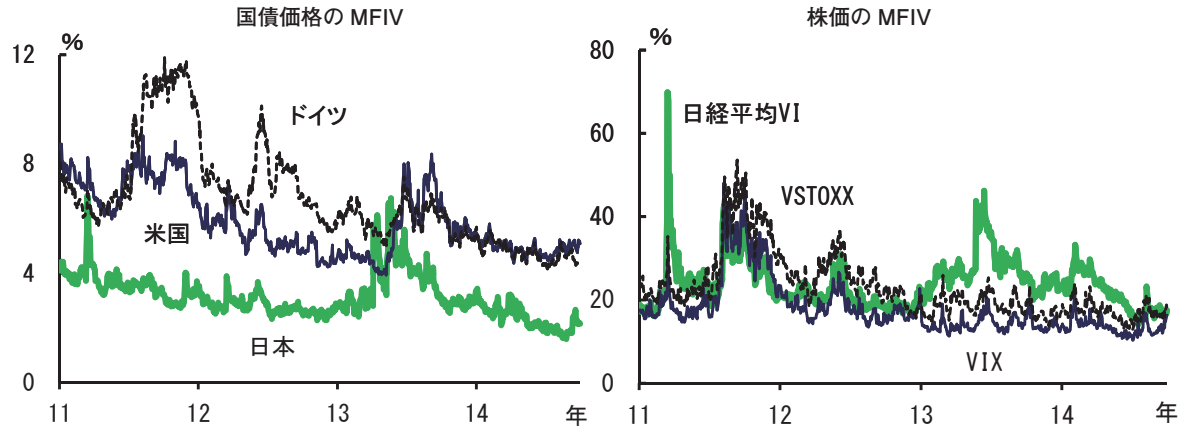
以上のような点を踏まえ、将来にわたって金融安定を確保していくうえでの金融機関経営の課題は次の三点です。これらへの取組みが、先行きの金融機関の健全性や収益力を規定する重要なファクターになっていくと考えられます。

第一に、金融機関は、景気回復に伴う資金需要への適切な対応に加え、国・地域の産業活力向上への貢献が期待されています。成長事業への投融資、事業再生や産業の新陳代謝等への積極的な取組みを含め、活力ある金融仲介機能の発揮とそれを可能とする金融手法、リスク管理力の強化が必要です。

第二に、わが国経済のグローバル化の進展により、金融機関の海外業務は今後も拡大していくと見込まれます。外貨資金は市場調達の比重が高いことも踏まえて、業務拡大に対応した安定調達基盤の確保、与信管理等の充実が必要です。また、国際的に活動する大規模金融機関は、金融システム全体の安定性と機能度に大きな影響力を有することから、国際規制改革等への適切な対応を含めて、より高い基準での健全性と経営管理が求められます。

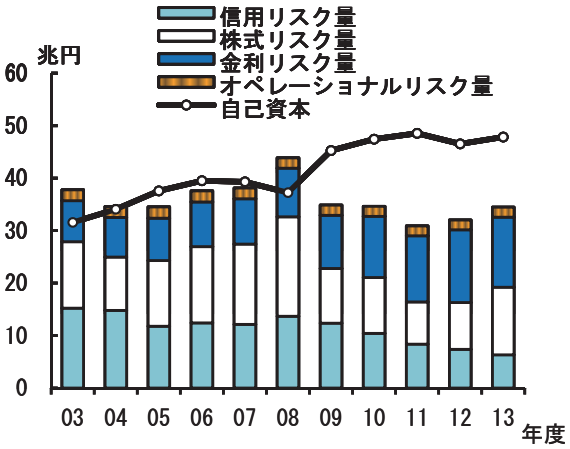
第三に、大幅な「預金超過」が続くもとで、資産負債管理（ＡＬＭ）における有価証券投資の重要性は引き続き高くなっています。昨年来、金融機関の間では、投資信託や外国証券への投資を増やすなど、リスク・バランスを見直す動きもみられていますが、引き続き円債が有価証券投資の中心を占めており、円金利リスクは時系列的には高めの水準にあります。金融機関は、ＡＬＭの明確

図表５　国際金融資本市場におけるボラティリティ



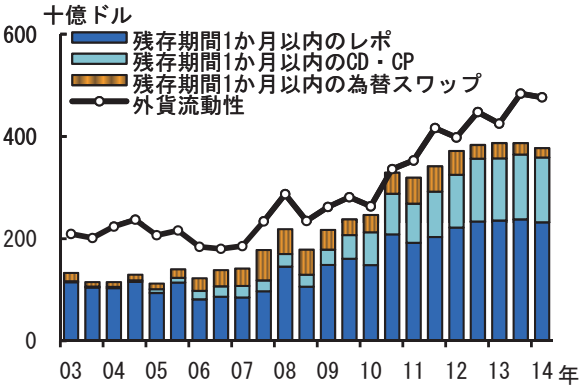
（注）1. 国債の MFIV は、日本は大阪取引所「長期国債先物オプション」、米国はシカゴ商品取引所「米国長期国債先物オプション」、ドイツは Eurex「ドイツ長期国債先物オプション」を用いて算出。先行き３か月までの国債価格の変動に対応している。
2. 直近は９月 30 日。
（資料）Bloomberg、日本銀行

図表６　金融機関のリスク量と自己資本



（注）1. 集計対象は銀行と信用金庫。
2. 信用リスク量は非期待損失（信頼水準 99%）、株式リスク量は VaR（信頼水準 99%、保有１年）、金利リスク量は 100bpv、オペレーショナルリスク量は業務粗利益の 15%。銀行の金利リスク量はオフバランス取引（金利スワップ）を考慮。
3. 株式リスクは株式投信を含まない。信用リスクは外貨建て分を含む。株式リスクと金利リスクは大手行のみ外貨建て分を含む。
（資料）日本銀行

図表７　大手行の外貨流動性のストレス耐性



（注）1. 集計対象は大手行。直近は 14 年３月末。
2. 外貨流動性＝現金＋預け金＋レポ取引分を除く米国債＋残存期間１か月以内のレポ調達額
（資料）日本銀行

な方針を定め、適切なリスク・テイクと管理を行っていくことが必要です。

日本銀行は、以上のような課題に対する金融機関の取組みや収益力の状況等について、日常的なモニタリングや考査を通じて金融機関との対話を深めていくとともに、金融機関の経営管理、リスク管理の向上を促していきます。また、国・地域の産業や企業の実情、活力向上に向けた課題や金融面から取り得る対応などについても、金融機関と意見交換を行っていきます。金融仲介機能やリスク管理の向上に資するテーマについては、セミナーの開催等を通じて、問題意識やノウハウの共有を図っていきます。

また、日本銀行は、金融システム全体の安定確保に向けて、マクロ・プルーデンスの視点から、引き続き、金融システムの安定性と機能度を検証していきます。そのうえで、必要に応じ、リスクの所在、課題や所要の対応などについて、幅広い金融システム関係者との間で、認識の共有や協議を行っていきます。

貨幣博物館資料をFRB美術品展示会へ出展

▼FRB（連邦準備制度理事会）では、一九八九年以降、秋のIMF・世銀総会時に、海外一カ国の中央銀行と共催のかたちで、各国の美術品展示会を米国ワシントンDCにあるFRB本館内で行っています。これまでに一〇回の展示会が開催され、今秋（九月二十九日～十一月二十一日）一一回目が開催されました。

▼その一一回目の展示会には、FRBからの求めに応じ、アジアから初めて、日本銀行が参加し貨幣博物館の所蔵資料を出展しました。また、貨幣博物館の所蔵資料を海外で展示するのもその三〇年の歴史の中で初めてのことです。

▼出展した資料は、貨幣博物館が所蔵する「錦絵」約一五〇〇点のコレクションから四六点を厳選しました。

▼錦絵は、米国での展示ということも念頭に置きつつ、貨幣関係資料の調査・研究や展示を行っている貨幣博物館の特徴を踏まえて、次の三種類で構成しました。第一に、錦絵でみる近世・近代の貨幣・経済史です。インフレやデフレによる当時の混乱を風刺した錦絵の紹介を交えつつ、米国との関係の深い幕末から日本銀行設立までをたどりました。第二に、芝居絵など江戸時代の風俗・文化を伝えるものです。第三に、大黒天や恵比寿など幸福と富を願う縁起物です。

錦絵「マケロマケヌ　賣買大合戦」

錦絵「品定開化花」

レセプションで挨拶する黒田総裁

▼今回の出展は、日本銀行とFRBとの関係強化に資するものです。IMF・世銀総会に合わせて開催されたレセプションでは日本銀行黒田総裁、FRBイエレン議長などによる挨拶も行われました。

▼また、貨幣博物館の所蔵する歴史的・文化的な資料を、海外で展示したことは、これまでの調査・研究の成果を広く公開していくという意味でも、意義深いことと考えられます。

▼貨幣博物館は、リニューアル工事のために二〇一四年末から休館入りしますが、今回、米国で展示した錦絵の一部は、二〇一五年十一月頃に予定されているリニューアルオープン時に、貨幣博物館でも展示することを予定しています。その際には、貨幣博物館三〇年の歴史で初めて海を渡った錦絵の魅力を、実感していただければ幸いです。

リニューアル工事に伴う貨幣博物館の一時休館について

▼貨幣博物館はリニューアル工事のため、本年二〇一四年十二月二十九日から一時休館することとなりました。そして、二〇一五年十一月頃（予定）に新たな博物館として生まれ変わります。

▼リニューアルのポイントは三つ。貨幣史における新たな研究成果を反映させた「お金の歴史の博物館」、資料の見せ方や解説を工夫した「分かりやすく楽しく学べる博物館」、デザインやレイアウトを一新した「親しみやすい博物館」です。

▼リニューアルオープンに関する情報は、貨幣博物館HPでお知らせいたします。

＜休館期間＞
二〇一四年十二月二十九日（月）～二〇一五年十一月頃（予定）
※最新の休館、リニューアル関連情報は貨幣博物館HPをご覧ください。
http://www.imes.boj.or.jp/cm/
【入館料】無料
【所在地】東京都中央区日本橋本石町一―三―一（日本銀行分館内）
【お問い合わせ先】
〇三―三二七七―三〇三七

貨幣博物館ホームページにスマートフォンページを新設

▼貨幣博物館では、来館案内に関するサービス向上のため、博物館への来館案内、開館カレンダー、アクセス情報に関するスマートフォン用のページを用意しました。また、パソコン用ページもスマートフォン用のページから簡単に見ていただくことができますので、ぜひご活用ください。

スマートフォンページ（トップ画面イメージ）

新潟支店は開設一〇〇周年を迎えました

▼日本銀行新潟支店では、支店開設一〇〇周年（一九一四年七月一日開設）を記念して、九月八日（月）と十八日（木）の両日、「記念講演および広報ルーム見学会」を多数の参加者や地元メディアの取材の中、開催しました。当日は千田英継（ちだひでつぐ）支店長による「日本銀行新潟支店一〇〇年の歴史と役割」と題する講演のあと、新たな広報ルームのお披露目を兼ねて、参加者の方々に一〇〇周年記念の特別展示をご覧いただきました。講演では、当時の経済に大きなウエートを占めていた米の主要生産地で全国有数の人口を有していた新潟に支店を設置した経緯や、災害時等に果たしてきた役割を紹介しました。特別展示では、新潟支店の歩みを振り返る「写真パネル」や「金塊」・「昔の紙幣や小判」（いずれもレプリカ）などをご覧いただきました。ちなみに、新しい広報ルームは従来の二倍以上広くなり、貨幣や紙幣の重さを実感していただける体験コーナーやお札の肖像になって記念写真を撮ることができるコーナーを設置しているほか、「お札で測る身長計」やお札の裁断屑で作った「札だるま」等も展示しています。

千田支店長による講演。開設から今日までの100年間を参加者の方々とともに振り返りました

新広報ルームでの特別展示。パネル（支店の歩み）のほか、金塊・小判のレプリカも。記念写真（あなたもお札の肖像に）・体験（1億円の重さを実感）コーナーも大好評！

▼さらに、新潟支店では、新潟県内各地で開設一〇〇周年に関連した講演を行ったほか、新潟支店のホームページに特設ページも設けました。前述の記念イベントの模様や特別展示の内容等の詳細については、同特設ページをご覧ください。

▼新潟支店は、これからの一〇〇年においても、新潟県における金融インフラの担い手として、また、各種の調査・分析に基づく情報発信を行うこと等を通じて、地域経済の一層の発展に貢献していきたいと考えています。

「にちぎん体験二〇一四」を開催

十月二十七日(月)～十一月三日(月・祝)

▼日本銀行本店（東京都中央区日本橋本石町）では、「にちぎん体験二〇一四」を開催しました。レクチャー付き見学ツアーのほか、「辰野

市民講座で日銀の仕事についてお話ししました

東京駅を設計した辰野金吾は、日銀本店本館の設計を先に手掛けたことをご存じでしたか

金吾と日本銀行本館」と題した企画展、ミニ見学付き市民講座を実施し、八日間で延べ約四〇〇〇人の方にご来場いただき、盛況のうちに終了しました。

▼平日五日間に実施したレクチャー付き見学ツアーでは、国の重要文化財に指定されている本店本館（旧地下金庫エリア、旧営業場など）や新館営業場へご案内した後、「日本銀行の仕事」をテーマに日銀職員がレクチャーを行いました。

▼休日の三日間には、企画展として、二〇一四年に開業一〇〇周年を迎えた東京駅の駅舎を設計した辰野金吾博士による日本初の本格的西洋建築である日銀本店本館についての展示を行いました。

同じく休日に実施した市民講座では、日銀の仕事や日常生活との関わりを分かりやすく紹介した「にちぎん入門」のほか、「お札の一生と日本銀行」、「ネットバンキングの安全な使い方」などといった身近な話題をテーマに取り上げ、日銀職員がお話ししました。

▼日本銀行では、今後も皆さまが楽しみながら日銀を身近に感じていただけるようなイベントを実施していきたいと考えておりますので、どうぞご期待ください。

なお、本店見学ツアーは、平日であれば事前のお申し込みにより随時ご参加いただけます。

※詳細は日銀HPをご覧ください。
http://www.boj.or.jp/about/services/kengaku.htm/

編集後記

■「江戸時代、寺子屋の必修科目は手紙文」。田中総長の話にハッとした。各地で藩の財政逼迫（ひっぱく）もあり農業振興に取り組む中、商品作物の生産が増加し、商業が発達した……。学校教科書に描かれた江戸時代の世界に、ものを売るべく方言を乗り越えコミュニケーションに苦労する、生身の人間の姿が忽然（こつぜん）と現れた。当時の人びとの生き抜く姿だ。

舞台は異なれど、語学の壁を乗り越え、メールを始め様々なＩＴを駆使してビジネスを展開し、生き抜こうとする現代人と重なりあう。

一方、未来に目を転ずると、「人間が火星旅行をするには、食料や酸素などを地上からの補給に頼らず確保する生活インフラ技術が必要になる」と奥村理事長は語る。どんな技術が編み出されるのか、非常に楽しみだ。人間が生きていくために必要なものである以上、地球上の基礎技術があっての話であろうし、それゆえに技術が完成した暁には、地上に新たなビジネスチャンスをもたらす可能性を秘めている。

時代とともに舞台は変われども、そこに生き抜く人間の姿を想像すると、そこに一本の線が見えてくる。ますますグローバル化が進み、国際競争が激化する中にあっても、「人間が生き抜くためには何が必要か、何をすべきか」、この軸を見失わないことが大切なのだろう。（丹治）

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDF ファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。
（http://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/）

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ（http://www.boj.or.jp/）をご覧ください。

にちぎん　2014 年冬号
編集・発行人　丹治芳樹
発行　日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町 2-1-1
☎ 03-3277-2405

デザイン　株式会社市川事務所
印 刷　サンメッセ株式会社
©日本銀行情報サービス局　禁無断転載

＊本誌の用紙は、環境・社会・経済のすべての側面に配慮した厳しい基準に従って適切に管理された森林からの木材を原料としていることを示す、FSC 認証紙を使用しています。

from France

淑女の個性的な帽子は注目の的

老いも若きも楽しむ凱旋門賞

かつて英国の女王も馬主として臨席したという由緒ある競馬レースである凱旋門賞は、毎年10月の第1日曜日に、パリ南西部のロンシャン競馬場で開催されます。今年は10月5日、気温がぐっと下がって冷え込んだ曇天の下で催されました。

1920年の創設以来、パリの秋の風物詩となっている凱旋門賞ともなると人出も多く、人々はギャンブルというよりは緑の芝を駆け抜ける美しい競走馬を眺め、お祭り気分を楽しむために会場に出向きます。英国のアスコットレースなど、競馬の大レースの日には、欧州の淑女は華やかかつ個性的な帽子を競うように着用するということをご存じの方もいらっしゃるかも知れませんが、凱旋門賞でもそうした方があちこちにいて、観客の目を楽しませていました。

もっとも、着飾っている人しか会場に入れないかというと、全然そんなことはありません。むしろ観客の9割はカジュアルな服装です。小さな子供がいる家族連れも多く、子供たちはパドックにいる競走前の馬を見て目を輝かせたり、場内の広いスペースで（競馬など関係なく）鬼ごっこをしたりして楽しんでいます。屋台で売っているハンバーガーやクレープを頬張るのも、子供たちには楽しみなようです。

さてこの日、注目の凱旋門賞は午後4時半から始まりました。レースは20頭で争われ、2分半ほどの間の勝負です。

今回で93回目となる同レースの歴史において、欧州以外の国の優勝はまだありません。このレースの制覇は日本競馬界の悲願だそうで、今年はハープスター、ジャスタウェイ、ゴールドシップという3頭が日本から参戦しました。結局、地元フランスのトレブという馬が昨年に続いて2連覇を達成し、日本競馬界の悲願達成は来年以降に持ち越しとなりましたが、賭ける賭けないや日本馬の勝敗はさておき、駆ける競争馬の美しさを堪能する一日でした。

（日本銀行パリ事務所）

＊本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。

地響きを立てて駆け抜ける馬たち

競走馬の入場にスタンドからは歓声が

にちぎん　第一〇巻　第四号　通巻四〇号　平成二十六年十二月二十五日発行

にちぎん

ISSN 1880-0327